

山 王 遺 跡

—仙塩道路建設関係遺跡平成 3 年度調査概報 —

平成 4 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
多 賀 城 市 教 育 委 員 会
建設省東北地方建設局

序 文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、それを地域づくりの拠点として整備し活用していこうといった考え方を持つところが多くなってきております。

宮城県としても本間知事の提唱により平成 2 年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21 世紀に向けた新たな県土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設や圃場整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなっています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよがとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにつきさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成 3 年度に当教育委員会が行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成 4 年 3 月

宮城県教育委員会教育長 大立目 謙 直

例　　言

1. 本書は建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路建設計画に伴う山王遺跡の調査概報である。
2. 調査の主体は宮城県教育委員会であり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関から指導、助言を賜った（以下敬称略）。

 - 岡田茂弘（国立歴史民俗博物館）、藤沼邦彦、加藤道男（東北歴史資料館）、進藤秋輝、古川雅清、真山悟、丹羽茂、柳沢和明、村田晃一（宮城県多賀城跡調査研究所）、石川俊英、千葉考弥、相沢清利（多賀城市埋蔵文化財調査センター）、早田勉（古環境研究所）、伊藤裕（松島高校）、鈴木拓也（東北大大学院）
 - 東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、多賀城市埋蔵文化財調査センター

4. 漆紙文書の処置および判読に際しては、進藤秋輝、鈴木拓也の両氏に御教示頂き、とくに、鈴木氏には漆紙文書について執筆して頂いた。
5. 本書における土色についての記述にあたっては『新版標準土色帳』（小山・竹原；1973）を利用した。
6. 本書の第1図・第22図は5千分の1の多賀城市都市計画図を複製して使用した。
7. 本書は調査員全員が協議しながら菅原弘樹が執筆・編集し、高橋栄一・千葉正康・三好秀樹がこれを援けた。
8. 本書中の遺構のトレースは高橋、また遺物の実測・トレースは千葉、三好、斎藤吉弘、菅原が行った。
9. 本書中の第I・II章は昨年度までの調査概報に一部加筆し、転載したものである。また、本書とこれまでに刊行された調査概報および現地説明会資料等で内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
10. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の位置と環境	3
III	発見された遺構と遺物	3
1.	古墳時代	4
2.	古代	7
3.	中・近世	29
4.	その他の遺物	29
IV	考察	34
1.	古墳時代の遺構	34
2.	古代の遺構	34
V	まとめ	39

調 査 要 項

遺 跡 名：山王遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号18013）

遺跡記号: F I

所 在 地：宮城県多賀城市南宮字八幡

調査面積: 約5600m²

調査期間: 平成3年4月8日～12月20日

調査担当: 宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員: 白鳥良一・菅原弘樹・高橋栄一・千葉正康・三好秀樹

斎藤吉弘・佐藤則之・小村田達也・天野順陽・大和幸生・吾妻俊典

I 調査に至る経過

建設省東北地方建設局、日本道路公団仙台建設局、宮城県道路公社、宮城県、仙台市で構成する仙塩地区総合交通計画委員会は昭和47~52年に仙台湾高規格幹線道路事業計画を立案した。その路線は亘理町中泉で国道6号線に連結して仙台市、多賀城市、利府町、松島町、鳴瀬町、矢本町、石巻市、桃生町を経て、岩手県宮古市に至るもので、そのうち仙台松島道路の一部（利府I.C.～松島I.C.間）は工事が完成し、昭和62年から供用が開始されている。この仙台松島道路の南終点である利府町春日から仙台市中野に至る7.1kmが東北地方建設局仙台工事事務所が建設を担当する仙塩道路である。

仙塩道路の計画決定に伴い、宮城県教育委員会は利府町教育委員会、多賀城市教育委員会と共に昭和57年3月に分布調査を実施した。その結果、利府町の丘陵部で5遺跡、特別史跡多賀城跡の西から南にかけて隣接する沖積地地域で市川橋遺跡、山王遺跡、六貫田遺跡がかわることになった。これらの地域は奈良・平安時代の陸奥国府多賀城をとりまく地域にあたるため、路線敷のほぼ全てに遺構の存在が予想され、とくに山王遺跡はこれまで他の事業にかかわる調査結果からみて、きわめて濃密な遺構の存在が推定された。

そこで昭和63年11・12月に山王遺跡と市川橋遺跡のうち1500m²について確認調査（第1次調査）を実施した。その結果、本遺跡では古代の掘立柱建物跡や多賀城に関わる道路遺構などが検出されたほか、その下層から古墳時代後期・中期、縄文時代の遺構や遺物が発見された。また、市川橋遺跡でも8枚にわたる水田遺構が重複していることが確かめられた。

「多賀城インターインジ」予定地を対象とした本地区の本格的な調査は、平成元年度より継続して行われ、これまでに自然堤防部分約11300m²について調査した。調査は対象地域を宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が分担し、受託する形で行われ、平成二年度までに県教育委員会が約7200m²（第2・3次調査）、市教育委員会が約4100m²（第2次調査および多賀城第10次調査）について調査を実施した。その結果、東西および南北の道路跡や掘立柱建物跡、堅穴住居跡、畝状遺構などの古代の遺構が多数検出されるとともに、多量の土器をはじめ、瓦や硯、漆紙文書、木簡など多賀城と密接な関わりをもつ遺物も多数発見された。また、古墳時代中期の遺物包含層や古墳時代後期の集落、堀を方形に巡らせた中世の屋敷跡なども発見されており、遺跡全体の変遷が明らかになりつつある。

本年度の第4次調査は昨年と同様にインターインジ予定地のうち、宮城県教育委員会が昨年度からの継続調査約1500m²を含む約5600m²、多賀城市教育委員会が約2700m²について東北地方建設局から受託し、調査を実施した。本概報は県教育委員会が実施した分の調査成果をまとめたものであり、多賀城市教育委員会受託分については別途調査概報（多賀



A区：第2次調査区 B区：第2次・第3次調査区 C区：第3次・第4次調査区 D区：第4次調査区
E区：多賀城市第10次調査区 F区：多賀城市第12次調査区

第1図 山王道路の位置と周辺の道路

城市「山王遺跡第12次発掘調査概報」)が刊行される予定である。

II 遺跡の位置と環境

多賀城市は市域のほぼ中央を流れる砂押川によって東・北部の丘陵部と、南・西部の沖積平野部とに二分される。平野部は仙台平野の北東部にあたり、海岸まで広がっている。

山王遺跡は仙台平野の北東端に位置し、東西に長い自然堤防上に立地する。この自然堤防上には新田遺跡、市川橋遺跡、六貫田遺跡も立地している。遺跡の範囲は多賀城市山王および南宮を中心とする東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる。今回の調査区は本遺跡の北東端に当たる多賀城市南宮字八幡地区で、昨年度の調査区と隣接している。付近の標高は約4mである(第1図)。

本遺跡の周辺には北東約1kmの丘陵上に特別史跡多賀城跡をはじめ、館前・大臣宮遺跡、多賀城廬寺など、多賀城と密接な関連をもつ遺跡や寺院跡が存在する。このように、本遺跡は古代の国府周辺地域の様相を解明する上で重要な位置を占めている。

山王遺跡は、これまでに多賀城市教育委員会によって多くの調査が実施され、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構や遺物が多数検出されている。古墳時代の遺構は山王二区・西町浦・東町浦の各地区で検出されている。とくに西町浦地区(多賀城市第3次調査)では中期の土壙墓や竪穴住居跡とともに多量の石製模造品が出土している。また、東町浦地区(多賀城市第8次調査)では同時期の木組み遺構が検出されている。奈良・平安時代については多賀城跡との関連から遺構・遺物とも非常に多く、道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壙などが多数検出されている。そのなかでも東町浦地区(多賀城市第4・8次調査)では多賀城跡外郭南辺とほぼ平行する幅12mの東西方向の道路跡が、千刈田地区(多賀城市第9次調査)では国守の館跡とみられる建物跡が発見されている。

III 発見された遺構と遺物

今回の調査は、昨年度からの継続調査部分約1500m²(C区)とその東側部分約4100m²(D区)を対象とした確認調査および事前調査である。

平面図作成にあたっては、平成元年度の第2次調査において設定した原点(0,0)をもとに東西・南北の基準線を延長し、調査区内に3m毎の方眼を組んで行った。原点の国家座標はX=188.880.000、Y=13.230.000である。

今回の調査では、次のような遺構が検出された。道路跡5条、掘立柱建物跡20棟以上、竪穴住居跡50軒、柱列2条、井戸跡13基、畝状遺構2面、溝跡90条以上、土壙70基以上、河川跡3条、多数の柱穴などである。またこれらの遺構や堆積層、表土などからは、土師器、須

恵器、赤焼土器、陶磁器、瓦、鉄製品、土製品、石製品、古銭、木製品、骨角器、動植物遺存体などが出土し、量的には整理用の平箱で300箱程になる。以下、古墳時代、古代、中近世の順に遺構・遺物の概要を説明する。ただし、調査および遺物整理が中途であることから現時点では明らかになっている遺構・遺物についてのみ報告することとし、その他のものについては本報告あるいは来年度の概報において詳細を述べることとする。

なお、これらとは別に来年度以降の調査予定地（L・M・N・J区）についても、トレンチによる確認調査を行った（第1図）。その結果、L①・L②・Mトレンチでは掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土壌などが多数検出され、遺構が北側にさらに延びていることが確認された。一方、N・Jとレンチでは、J区で東西道路跡および掘立柱建物跡が数棟検出されただけで、全体的に遺構が少ないことが明らかになった。

1. 古墳時代

古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡35軒以上、溝跡、土壌などがある。

A. 竪穴住居跡

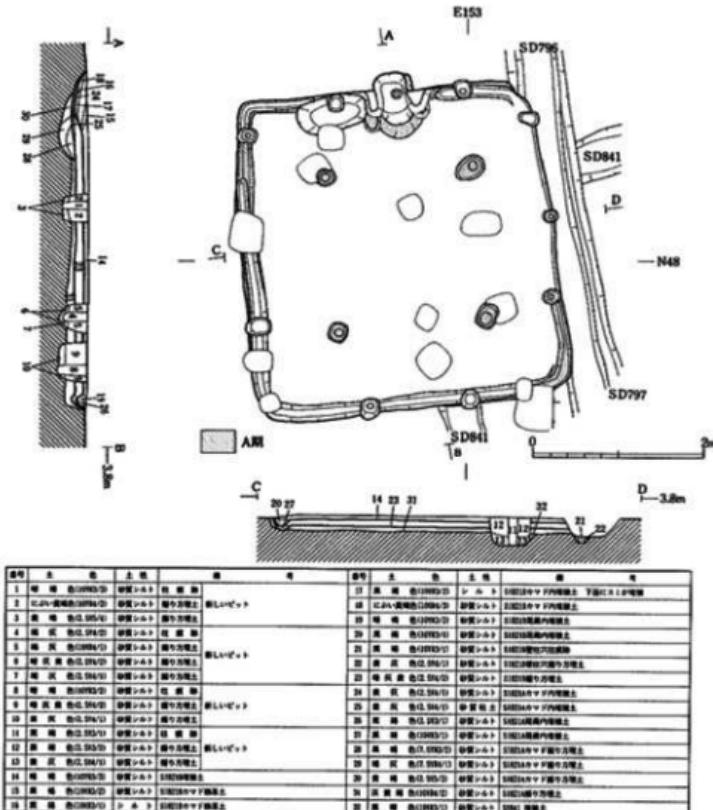
古墳時代の竪穴住居跡はD区北半部に集中して検出された。同位置での重複がかなりみられるが、後世の搅乱等により削平されているものが多い。ここでは精査が終了した中で比較的残りが良く、遺物量の多いSI821について説明する。

【SI821竪穴住居跡】D区北東隅で検出された。SI824竪穴住居跡、SD796・797・841溝跡および多数のピットと重複しており、SD796・797、ピット群より古く、SI824、SD841よりも新しい。同位置、同規模で1度改築されている。一边が7.5mの正方形で、住居の方向は西辺でN- δ -Wある。

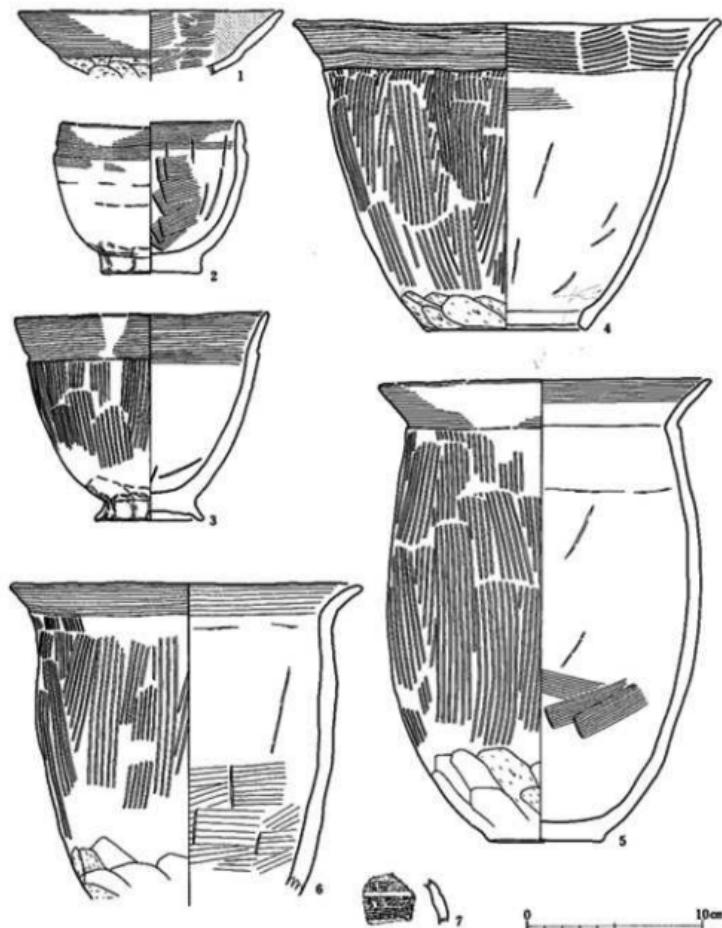
SI821Aは掘り方を掘り灰黄褐色土で貼床して床面としている。周溝は断面が「U」形、幅約15cm程、深さ5cm程である。東辺についてはSD796・797に壊され不明である。カマドは北辺のほぼ中央に地山土を貼って作られており、燃焼部を僅やかに窪ませている。柱穴は4個検出され、柱間隔は北辺で1.8m、西辺で1.9mある。形状は隅丸方形で一边が20~30cm程、深さが30~50cmで、埋土は褐灰および灰黄褐色土である。柱痕跡は径約15cmの円形である。遺物は、床面、カマド、周溝、掘り方埋土中から土師器坏（第3図1）・甕（2・3・5）・瓶（4）・須恵器甕・壺（7）などが出土している。このうち、床面出土の4・5・6はカマド近くで、2・3は住居の南東隅でそれぞれまとめて検出された。

SI821Bは先行するSI821Aの上に暗灰黄色の地山土で貼床している。周溝は断面が「U」形、幅約15cm程、深さ10cm程で、西辺で一部途切れる。カマドはSI821Aと同じ場所に同様に作られており、燃焼部中央には支脚を据えたと思われる径10cm、深さ5cm

程の門形のピットが認められる。柱穴は10個の壁柱穴からなり、柱間隔は北辺で1.5m、東辺で北から1.2m・1.0mである。形状は隅丸方形で一边が20~25cm程、深さが30cm程で、埋土は黄灰色土である。柱痕跡は径約10cmの円形である。そのほかカマドの西隣で貯蔵穴と思われる0.8×0.4m、深さ15cm程の長楕円形を呈するピットを検出した。遺物は、床面、カマド、貯蔵穴状ピット、掘り方埋土、堆積土中から土師器壺・甕、須恵器甕などが出土している。



第2図 S1821住居跡



第3図 S1821住居跡出土遺物

番号	種別	出土状況	外観の特徴	内部の特徴	基盤	口径	底径	高さ	壁厚
1	土器部 瓦	S1-821A 房	ヨコテナジ	ヘタリガタ、表面無潤滑	引抜きヨコテナジ	5.5cm	—	0.65cm	—
2	土器部 瓦	S1-821A 房	口縁部ヨコテナジ、底面ヨコテナジ	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ	片埋設、高台付付近にサビ	5.5cm	5.7cm	0.65cm	0.1cm
3	土器部 瓦	S1-821A 房	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ、表面ヨコテナジ	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ	14.5cm	5.5cm	15.5cm	0.65cm	0.1cm
4	土器部 瓦	S1-821A 房	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ、底下部ヨコテナジ	底面ハラナギ、底面ハラナギ	14.5cm	5.5cm	15.5cm	0.65cm	0.1cm
5	土器部 瓦	S1-821A 房	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ、底下部ヨコテナジ	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ	水槽底	19.5cm	6.5cm	26.4cm	0.65cm
6	土器部 瓦	S1-821A 房	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ、底下部ヨコテナジ	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ	—	—	—	—	—
7	土器部 瓦	S1-821A 房	口縁部ヨコテナジ、底面ハラナギ	口縁部ヨコテナジ	—	—	—	—	—

B . 溝跡

【SD841溝跡】SI821竪穴住居跡よりも古い、「L」あるいは「弧」状に巡る溝である。断面が「U」形、上幅0.4~0.6m、下幅0.3~0.4m、深さ0.3m程であるが、東および南側が擾乱によって壊されており、全体の形や規模は不明である。堆積土は炭化物を部分的に多く含む黒褐色土である。堆積土中から土師器坏、甕などが出土している。

C . 河川跡

【SD555河川跡】C区およびD区の南半を蛇行しながら東流し、D区東端で東に膨らみながら北に折れる自然の流路である。SI821をはじめとする前述の竪穴住居跡群の間を縫つて流れしており、遺跡の北を流れる砂押川に合流する小河川跡と考えられる。SD14河川跡、SX390・500東西道路跡、SD100・420河川跡とほぼ同位置で重複し、これらよりも古い。規模は完掘したC区で上幅が5.0~6.0m、下幅が2.0~3.0m程で、確認面からの深さは0.5m程ある。堆積土は粗砂を多く含むややグラウイ化した黒色の粘質土からなり、最下部では砂層とスクモ層が互層をなす。堆積土中から土師器坏（第4・5図1・2・10~12）、蓋（3）、甕（6~9・14・15）、須恵器壺（16）、ミニチュア土器（4・5・13）、鋤（17）などが出土している。

なお、今回平面的な広がりについては捉えられなかったが、D区東端部で貝層および遺物包含層（SX850遺物包含層）が検出された。これらは主に河川が蛇行して膨らむ部分の落ち際に形成されており、炭化物や灰、焼土を多く含む層中からは多量の土器や動植物遺存体などが確認されている。

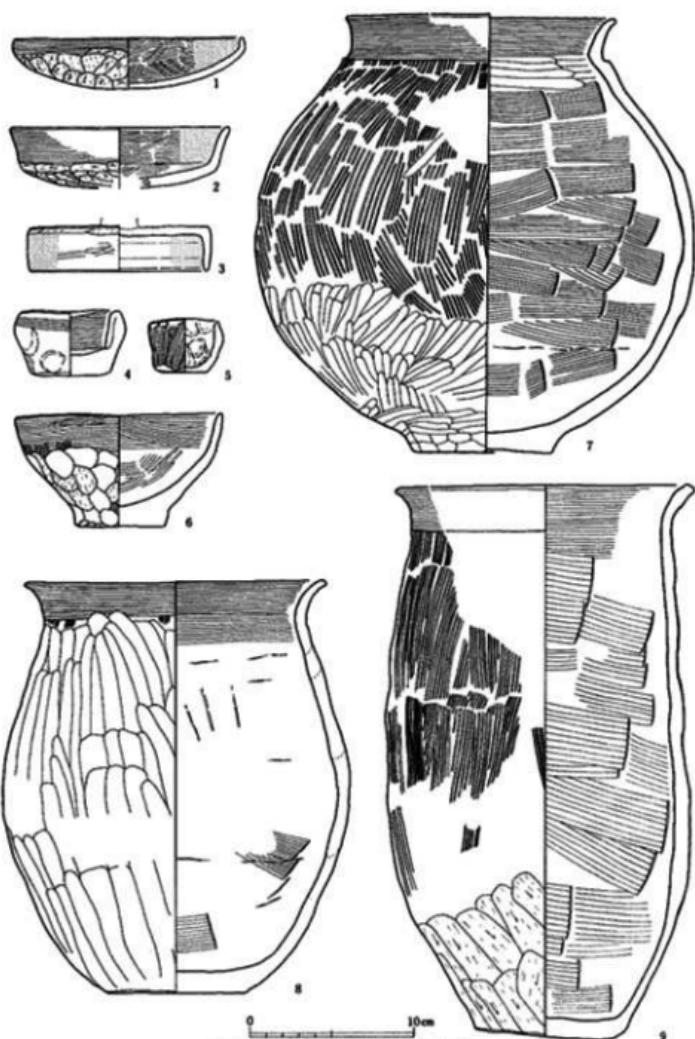
2 . 古代

古代の遺構としては道路跡5条、掘立柱建物跡20棟以上、柱列2条、井戸跡6基、畝状遺構2面の他に多数の溝跡、土壤などがあり、他に河川跡がある。

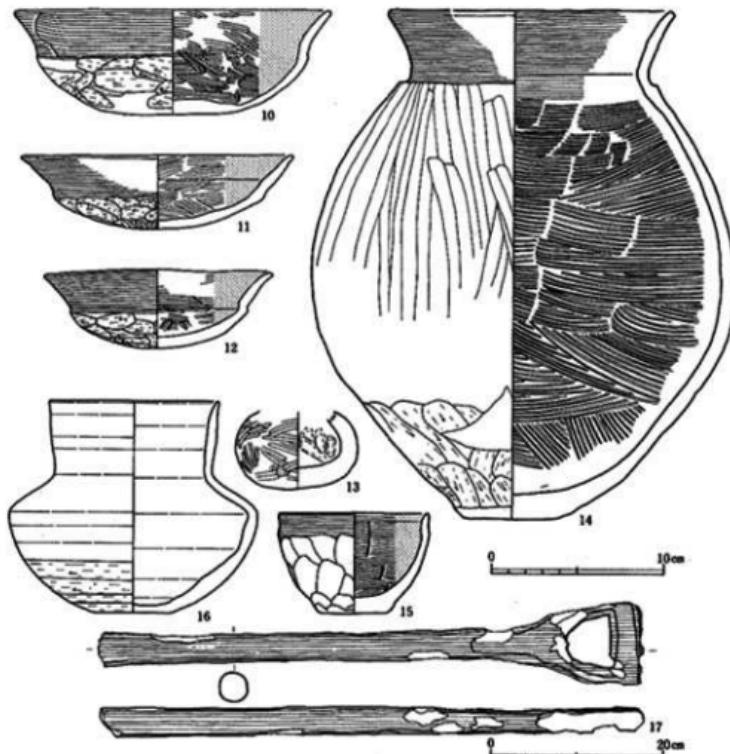
A . 道路跡

D区中央部で交差する東西道路跡2条（SX390・710）と南北道路跡2条（SX700・750）、また同位置でこれらより古い東西道路跡1条（SX500）が検出された。いずれも昨年度までの調査で検出された道路跡の延長部分にあたる。

【SX390道路跡】D区西端から中央東寄りにかけて検出された東西道路跡で、昨年度C区南端で検出された東西道路跡の東延長である。SX500東西道路跡、SD14・800河川跡などと重複し、SD14より古く、SX500、SD800よりも新しい。C区南西端でSX400南北道路跡



第4図 SD555河川跡出土遺物(1)



番号	種 別	出土地・層	内 容 の 説 明	内 容 の 説 明	寸 法	寸 法	高さ	幅	厚さ	説明
1	土器類 瓢	SD-555 2-2	コロナド	ヘリコロ。表面無施	手打ちヘリコロ	34.0cm	3.1cm	0.70	9-2	
2	土器類 瓢	SD-555 2-2	コロナド	ヘリコロ。表面無施	手打ちヘリコロ	33.4cm	-	0.60	9-3	
3	土器類 瓢	SD-555 2-2	ヘリコロ。褐色施	ヘリコロ。褐色施	コロナド。褐色施	35.5cm	-	0.60	9-1	
4	土器類 瓢	SD-555 1	コロナドコロナド。褐色オマニ	コロナド	3.1cm	4.8cm	4.7cm	0.70	10-8	
5	土器類 瓢	SD-555 1-2	コロナドコロナド。褐色オマニ	オマニ	4.2cm	3.1cm	2.3cm	0.60	10-7	
6	土器類 瓢	SD-555 1	コロナドコロナド。表面ヘリコロ	口縁コロナド。表面ヘリコロ	33.4cm	3.4cm	0.60	10-4		
7	土器類 瓢	SD-555 1-2	コロナドコロナド。表面ヘリコロ	口縁コロナド。表面ヘリコロ	33.4cm	3.4cm	0.60	10-2		
8	土器類 瓢	SD-555 1-2 2	コロナドコロナド。表面ヘリコロヘリコロ	口縁コロナド。表面ヘリコロ	33.4cm	3.4cm	0.60	10-3		
9	土器類 瓢	SD-555 2	コロナドコロナド。表面ヘリコロ。底下部ヘリコロ	口縁コロナド。表面ヘリコロ	33.0cm	3.3cm	0.60	10-3		
10	土器類 瓢	SD-555 2	コロナド	ヘリコロ。表面無施	手打ちヘリコロ	33.4cm	3.4cm	0.60	9-3	
11	土器類 瓢	SD-555 2-2	コロナド	ヘリコロ。表面無施	手打ちヘリコロ	33.4cm	3.4cm	0.60	9-4	
12	土器類 瓢	SD-555 2	コロナド	ヘリコロ。表面無施	手打ちヘリコロ	33.4cm	3.4cm	0.60	9-5	
13	土器類 瓢	SD-555 2-2	コロナド	ヘリコロ。表面無施	手打ちヘリコロ	33.4cm	3.4cm	0.60	9-6	
14	土器類 瓢	SD-555 1-2	コロナド。表面ヘリコロ。底下部ヘリコロ	口縁コロナド。表面ヘリコロ	33.4cm	3.4cm	0.60	9-1		
15	土器類 瓢	SD-555 2	コロナドコロナド。表面ヘリコロ	口縁コロナド。表面ヘリコロ	3.6cm	4.0cm	0.60	10-5		
16	土器類 瓢	SD-555 2-2	コロナドコロナド。底下部ヘリコロ	コロナド	3.6cm	4.0cm	0.60	10-2		
17	骨 (骨頭)	SD-555 2-2	骨頭		(42.3cm)	3.4cm	0.3cm	-	-	

第5図 S D555河川跡出土遺物（2）

とつながり、D区中央東寄りでSX750・700南北道路跡およびSX710東西道路跡とほぼ十字状に交差する。総長で東西約109m（＝約1町）を測る。道路の方向は南側溝でE-1°-Nであるが、北側溝が東でやや北に振れている。このため、路幅はD区西端では1.5m程だが、D区交差点付近では約4mある。路面については、これを直接覆う灰白色火山灰層下でパラス等の路面施設が確認されなかつたことから、本来こうした施設はなかつた可能性が高い。側溝には古い順にA・B・Cの3時期の変遷が確認され、これらはほぼ同位置で作り替えられている。いずれも素掘りの溝で護岸などの施設は認められなかつた。側溝の規模はC期（SD361・362）で上幅1.0～1.5m、下幅0.5m、深さ0.5m程で、側壁は緩やかに傾斜している。堆積土は地山砂を含む黒褐色土で、堆積土上部に灰白色火山灰層が認められる。

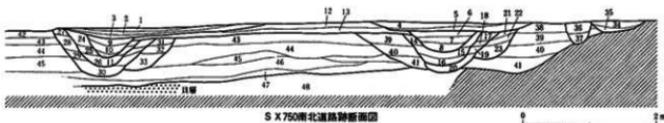
時期	北側溝	南側溝	他道路跡との接続		備 考
			西	東	
A	SD371	SD366	SX299A. 400A	SX710A. 750A. 700A	
B	SD373	SD367	SX299B. 400B	SX710B. 750B. 700B	
C	SD361	SD362	SX299C. 400C	SX710C. 750C. 700C	側溝や路面堆積土に灰白色火山灰を含む
D	機能せず				

【SX710道路跡】D区東端で検出された東西道路跡である。SX500東西道路跡、SD14・800河川跡などと重複し、SD14より古く、SX500、SD800よりも新しい。SX390東西道路跡の東延長上にある道路跡で、SX750・700南北道路跡と直交し、交差点の東約15mまで検出した。南北両側に素掘りの側溝を持ち、道路の方向はSX390と同様に南側溝でE-1°-Nである。路面については、これを直接覆う灰白色火山灰および砂層（水性堆積層）下でパラス等の路面施設が確認されなかつたことから、本来こうした施設はなかつた可能性が高い。側溝にはSX390と同様に、古い順にA・B・Cの3時期の変遷が確認され、これらはほぼ同位置で作り替えられている。路幅はいずれも2.5m程で、側溝の規模はC期（SD773・772）で上幅1.0～1.5m、下幅0.5m、深さ0.4m程で、側壁は緩やかに傾斜している。堆積土は地山砂を含む黒褐色土で、堆積土上部に灰白色火山灰層が認められる。

時期	北側溝	南側溝	他道路跡との接続		備 考
			西	東	
A	SD779	SD778	SX390A. 750A. 700A		
B	SD775	SD774	SX390B. 750B. 700B		
C	SD773	SD772	SX390C. 750C. 700C		側溝や路面堆積土に灰白色火山灰を含む
D	機能せず				

A₄

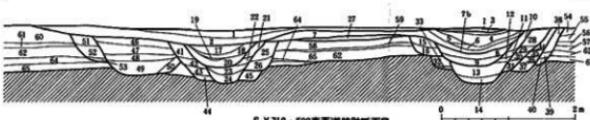
△ 4.9m



番号	土 壌	土 壈	地 面	番 号	土 壹	土 壈	地 面	番 号	土 壌	土 壈	地 面
1	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	1	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	12	3 3 1	シ ルト	41
2	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	13	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	14	43	シ ルト	42
3	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	15	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	16	44	シ ルト	43
4	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	17	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	18	45	シ ルト	44
5	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	19	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	20	46	シ ルト	45
6	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	21	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	22	47	シ ルト	46
7	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	23	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	24	48	シ ルト	47
8	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	25	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	26	49	シ ルト	48
9	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	27	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	28	50	シ ルト	49
10	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	29	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	30	51	シ ルト	50
11	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	31	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	32	52	シ ルト	51
12	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	33	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	34	53	シ ルト	52
13	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	35	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	36	54	シ ルト	53
14	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	37	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	38	55	シ ルト	54
15	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	39	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	40	56	シ ルト	55
16	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	41	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	42	57	シ ルト	56
17	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	43	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	44	58	シ ルト	57
18	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	45	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	46	59	シ ルト	58
19	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	47	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	48	60	シ ルト	59
20	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	49	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	50	61	シ ルト	60
21	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	51	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	52	62	シ ルト	61
22	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	53	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	54	63	シ ルト	62

B

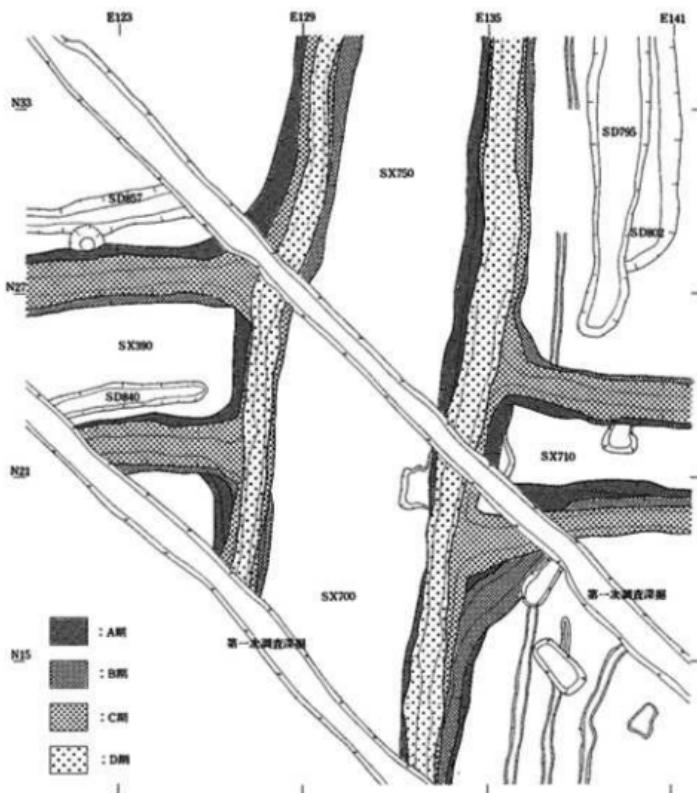
△ 4.0m



番号	土 壌	土 壈	地 面	番号	土 壈	土 壈	地 面	番号	土 壌	土 壈	地 面
1	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	2	13-18	黒(0.5W)	シ ルト	3	19-24	黒(0.5W)	シ ルト
2	黑 砂	白(0.5W)	シ ルト	4	25	黒(0.5W)	シ ルト	5	26-31	黒(0.5W)	シ ルト
3	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	6	32	黒(0.5W)	シ ルト	7	33-38	黒(0.5W)	シ ルト
4	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	8	39	黒(0.5W)	シ ルト	9	40-45	黒(0.5W)	シ ルト
5	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	10	46	黒(0.5W)	シ ルト	11	47-52	黒(0.5W)	シ ルト
6	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	12	53	黒(0.5W)	シ ルト	13	54-59	黒(0.5W)	シ ルト
7	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	14	60	黒(0.5W)	シ ルト	15	61-66	黒(0.5W)	シ ルト
8	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	16	67	黒(0.5W)	シ ルト	17	68-73	黒(0.5W)	シ ルト
9	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	18	74	黒(0.5W)	シ ルト	19	75-80	黒(0.5W)	シ ルト
10	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	20	81	黒(0.5W)	シ ルト	21	82-87	黒(0.5W)	シ ルト
11	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	22	88	黒(0.5W)	シ ルト	23	89-94	黒(0.5W)	シ ルト
12	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	24	95	黒(0.5W)	シ ルト	25	96-101	黒(0.5W)	シ ルト
13	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	26	102	黒(0.5W)	シ ルト	27	103-108	黒(0.5W)	シ ルト
14	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	28	109	黒(0.5W)	シ ルト	29	110-115	黒(0.5W)	シ ルト
15	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	30	116	黒(0.5W)	シ ルト	31	117-122	黒(0.5W)	シ ルト
16	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	32	123	黒(0.5W)	シ ルト	33	124-129	黒(0.5W)	シ ルト
17	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	34	130	黒(0.5W)	シ ルト	35	131-136	黒(0.5W)	シ ルト
18	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	36	137	黒(0.5W)	シ ルト	37	138-143	黒(0.5W)	シ ルト
19	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	38	144	黒(0.5W)	シ ルト	39	145-150	黒(0.5W)	シ ルト
20	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	40	151	黒(0.5W)	シ ルト	41	152-157	黒(0.5W)	シ ルト
21	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	42	158	黒(0.5W)	シ ルト	43	159-164	黒(0.5W)	シ ルト
22	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	44	165	黒(0.5W)	シ ルト	45	166-171	黒(0.5W)	シ ルト
23	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	46	172	黒(0.5W)	シ ルト	47	173-178	黒(0.5W)	シ ルト
24	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	48	179	黒(0.5W)	シ ルト	49	180-185	黒(0.5W)	シ ルト
25	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	50	186	黒(0.5W)	シ ルト	51	187-192	黒(0.5W)	シ ルト
26	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	52	193	黒(0.5W)	シ ルト	53	194-199	黒(0.5W)	シ ルト
27	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	54	200	黒(0.5W)	シ ルト	55	201-206	黒(0.5W)	シ ルト
28	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	56	207	黒(0.5W)	シ ルト	57	208-213	黒(0.5W)	シ ルト
29	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	58	214	黒(0.5W)	シ ルト	59	215-220	黒(0.5W)	シ ルト
30	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	60	221	黒(0.5W)	シ ルト	61	222-227	黒(0.5W)	シ ルト
31	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	62	228	黒(0.5W)	シ ルト	63	229-234	黒(0.5W)	シ ルト
32	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	64	235	黒(0.5W)	シ ルト	65	236-241	黒(0.5W)	シ ルト
33	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	66	242	黒(0.5W)	シ ルト	67	243-248	黒(0.5W)	シ ルト
34	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	68	249	黒(0.5W)	シ ルト	69	250-255	黒(0.5W)	シ ルト
35	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	70	256	黒(0.5W)	シ ルト	71	257-262	黒(0.5W)	シ ルト
36	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	72	263	黒(0.5W)	シ ルト	73	264-269	黒(0.5W)	シ ルト
37	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	74	270	黒(0.5W)	シ ルト	75	271-276	黒(0.5W)	シ ルト
38	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	76	277	黒(0.5W)	シ ルト	77	278-283	黒(0.5W)	シ ルト
39	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	78	284	黒(0.5W)	シ ルト	79	285-290	黒(0.5W)	シ ルト
40	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	80	291	黒(0.5W)	シ ルト	81	292-297	黒(0.5W)	シ ルト
41	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	82	298	黒(0.5W)	シ ルト	83	299-304	黒(0.5W)	シ ルト
42	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	84	305	黒(0.5W)	シ ルト	85	306-311	黒(0.5W)	シ ルト
43	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	86	312	黒(0.5W)	シ ルト	87	313-318	黒(0.5W)	シ ルト
44	ミーフ砂	白(0.5W)	シ ルト	88	319	黒(0.5W)	シ ルト	89	320-325	黒(0.5W)	シ ルト

第6図 道路跡断面図

【SX750道路跡】D区中央部で検出された南北道路跡である。SX500道路跡、SD461溝跡、SD740（SD14の延長）・800河川跡などと重複し、SD740より古く、SX500、SD461・800よりも新しい。SX700南北道路跡の北延長上にある道路跡で、SX390・710東西道路跡とほぼ直交し、交差点の北約30mまで検出した。東西両側に素掘りの側溝を持ち、道路の方向は東側溝でN-2°-Eである。昨年度検出されたSX400南北道路跡とほぼ平行しており、両道



第7回 道路跡平面図

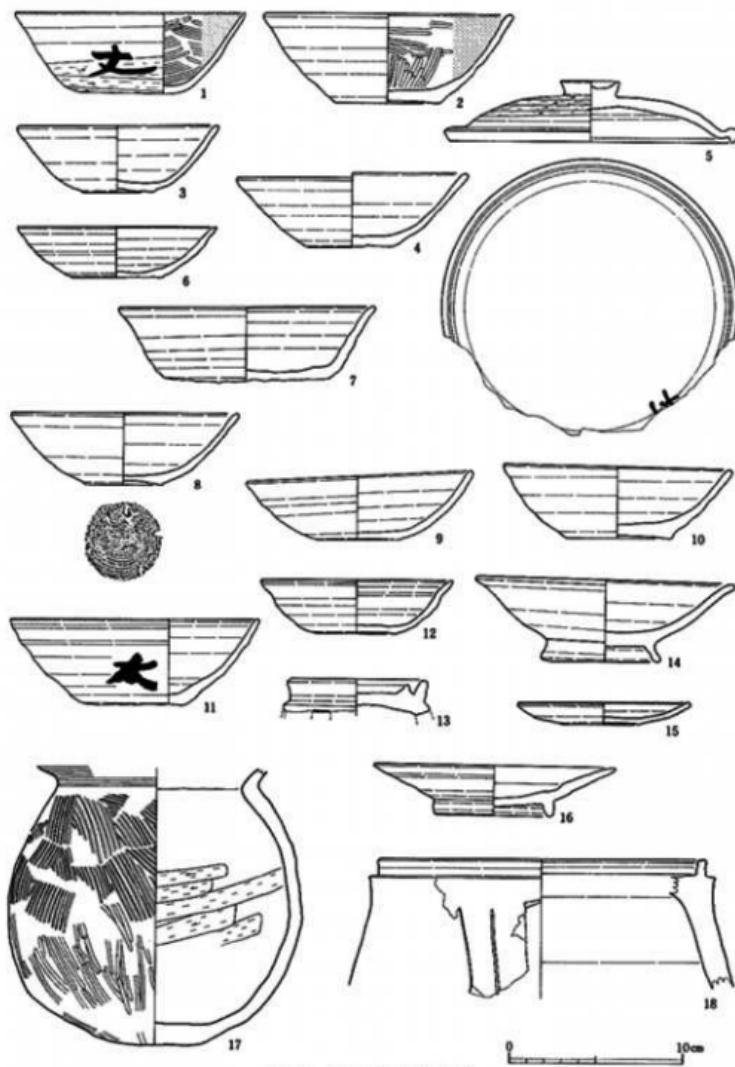
路間の距離はおおよそ109m（＝約1町）を測る。側溝には古い順にA・B・C・Dの4時期の変遷が確認されており、これらはほぼ同位置で作り替えられている。路面については、これの南延長上にあるSX700でバラスが確認されている（鈴木；1988）、本道路跡においては確認されなかった。灰白色火山灰および砂層（水性堆積層）が路面を直接覆っていることから、少なくともC期以前にはバラス等の路面施設はなかった可能性が高い。ただし、SX390・710東西道路跡の側溝との接続は、A・C期ではSX390・710の路面を貫いて「T」形に、B期ではそれぞれ北側溝と「L」形につながっている。路幅はいずれも4m程で、側溝の規模はD期（SD751・752）で上幅0.6～1.2m、下幅0.3～0.6m、深さ0.4程で、側壁は緩やかに傾斜している。堆積土は黒～黒褐色土である。

時期	西側溝	東側溝	他道路跡との接続 南	備考
A	SD863	SD862	SX700A, 390A, 710A	
B	SD861	SD860	SX700B, 390B, 710B	
C	SD832	SD831	SX700C, 390C, 710C	側溝や路面堆積土に灰白色火山灰を含む
D	SD752	SD751	SX700D	

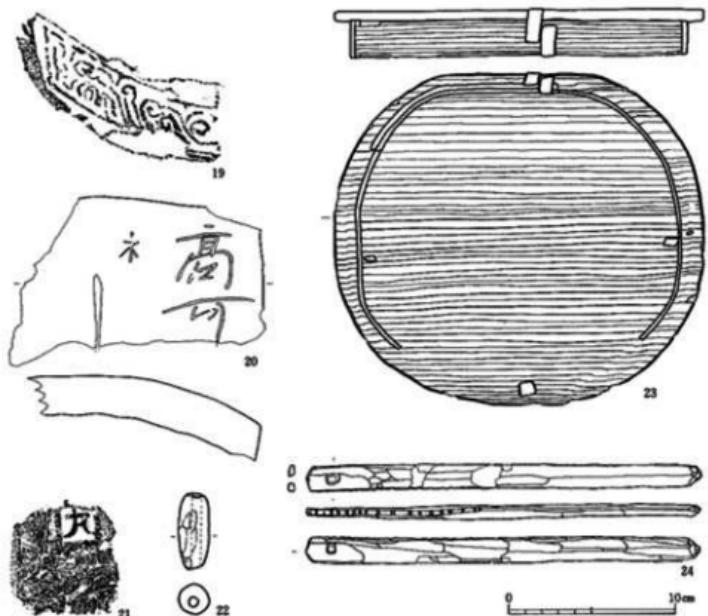
【SX700道路跡】D区中央部で検出された南北道路跡である。SX750南北道路跡の南延長上にある道路跡で、SX390・710東西道路跡と直交し、調査区南端（多賀城市調査分）でSX300東西道路跡とつながる。道路の方向は交差点付近で西にやや蛇行するが、これより南ではSX750と同様に東側溝でN-2°-Eである。また、側溝の変遷やSX390・710東西道路跡側溝との接続、路幅および側溝の規模や堆積土などについてもSX750と同様である。路面については、第1次調査でD期路面上で須恵器・土師器・瓦小破片からなるバラスが部分的に確認されているが（鈴木；1988）、C期以前では確認されなかった。これらを灰白色火山灰および砂層（水性堆積層）が覆っていることから、バラス等の路面施設はなかった可能性が高い。

時期	西側溝	東側溝	他道路跡との接続 北	備考
A	SD863	SD862	SX750A, 390A, 710A	
B	SD865	SD864	SX750B, 390B, 710B	
C	SD832	SD831	SX750C, 390C, 710C	側溝や路面堆積土に灰白色火山灰を含む
D	SD752	SD751	SX750D	

【SX500道路跡】昨年度C区南端で検出された東西道路跡の東延長である。SX390・710東西道路跡、SX750・700南北道路跡、SD14・800河川跡などと重複し、SX390・710・750・

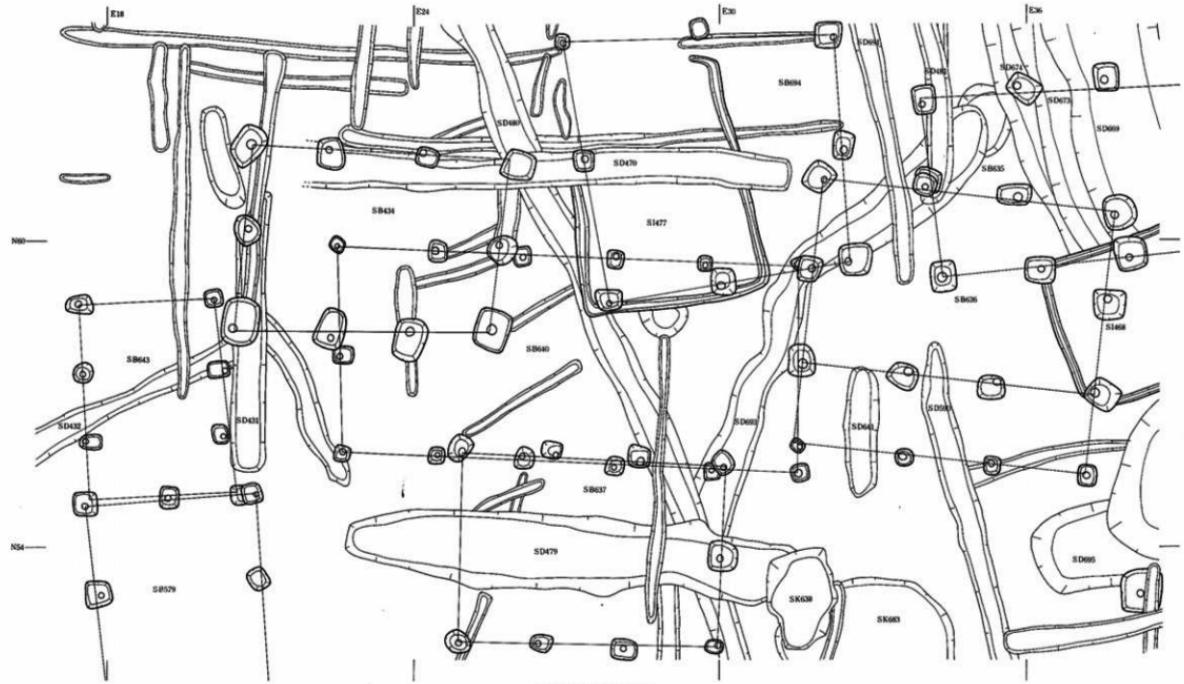


第8図 道路跡出土遺物（1）



番号	種別	出土地・層	名　　称	内　　容	規　　格	寸　　寸		寸　　寸		寸　　寸	
						横	縦	横	縦	横	縦
1.	銅鏡	石	SI-001	鏡	四神四葉。鏡子面有文字。鏡裏「七」	八八一四。鏡子面有 文字。鏡裏「七」	13.3cm	5.3cm	4.5cm	9.75cm	II-1
2.	銅鏡	石	SI-002	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	14.4cm	6.0cm	5.0cm	9.57cm	II-1
3.	銅鏡	石	SI-003	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	15.7cm	6.3cm	5.0cm	9.75cm	II-4
4.	銅鏡	石	SI-004	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.4cm	4.9cm	4.3cm	9.54cm	II-3
5.	銅鏡	石	SI-005	鏡	四神四葉。鏡子面有文字。鏡裏「七」	八八一四。鏡子面有 文字。鏡裏「七」	16.4cm	-	5.0cm	9.75cm	II-31
6.	銅鏡	石	SI-006	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	11.5cm	5.3cm	3.8cm	9.50cm	II-7
7.	銅鏡	石	SI-007	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	14.8cm	5.6cm	4.5cm	9.75cm	II-19
8.	銅鏡	石	SI-008	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.0cm	4.9cm	4.3cm	9.53cm	II-5
9.	銅鏡	石	SI-009	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.1cm	4.6cm	4.0cm	9.55cm	II-6
10.	銅鏡	石	SI-010	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.0cm	6.1cm	4.3cm	9.55cm	II-13
11.	銅鏡	石	SI-011	鏡	四神四葉。鏡裏「七」	八八一四。鏡子面有 文字。鏡裏「七」	14.4cm	6.0cm	5.0cm	9.75cm	II-11
12.	銅鏡	石	SI-012	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	11.6cm	6.7cm	3.1cm	9.52cm	II-9
13.	銅鏡	石	SI-013	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	5.3cm	-	-	9.75cm	II-12
14.	銅鏡	石	SI-014	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	15.5cm	5.5cm	4.5cm	9.75cm	II-13
15.	銅鏡	石	SI-015	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	14.8cm	5.6cm	4.5cm	9.75cm	II-19
16.	銅鏡	石	SI-016	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.0cm	4.9cm	4.3cm	9.53cm	II-5
17.	銅鏡	石	SI-017	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.1cm	4.6cm	4.0cm	9.55cm	II-6
18.	銅鏡	石	SI-018	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.0cm	6.1cm	4.3cm	9.55cm	II-13
19.	銅鏡	石	SI-019	鏡	四神四葉。鏡裏「七」	八八一四。鏡子面有 文字。鏡裏「七」	14.0cm	6.0cm	2.0cm	9.52cm	II-3
20.	銅鏡	石	SI-020	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.0cm	-	-	9.75cm	II-11
21.	銅鏡	石	SI-021	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	8.0cm	-	-	9.75cm	II-8
22.	銅鏡	石	SI-022	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	15.5cm	5.5cm	4.5cm	9.75cm	II-13
23.	銅鏡	石	SI-023	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	14.0cm	6.0cm	2.0cm	9.52cm	II-3
24.	銅鏡	石	SI-024	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.0cm	-	-	9.75cm	II-11
25.	銅鏡	石	SI-025	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	8.0cm	-	-	9.75cm	II-8
26.	銅鏡	石	SI-026	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	15.5cm	5.5cm	4.5cm	9.75cm	II-13
27.	銅鏡	石	SI-027	鏡	四神四葉。鏡裏「七」	八八一四。鏡子面有 文字。鏡裏「七」	-	-	-	9.75cm	II-11
28.	銅鏡	石	SI-028	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	13.0cm	-	-	9.75cm	II-11
29.	銅鏡	石	SI-029	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	8.0cm	-	-	9.75cm	II-8
30.	銅鏡	石	SI-030	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	15.5cm	5.5cm	4.5cm	9.75cm	II-13
31.	銅鏡	石	SI-031	鏡	四神四葉	八八一四。鏡子面有 文字。	14.0cm	6.0cm	2.0cm	9.52cm	II-3
32.	土器	石	SI-032	J-2	圓底盤の内側。鏡子面有 文字。	4.5cm	1.8cm	-	9.75cm	II-4	
33.	銅鏡	石	SI-033	J-3	鏡子面有文字。	22.1cm	19.3cm	2.8cm	-	29.11	
34.	銅鏡	石	SI-034	J-4	鏡子面有文字。	23.7cm	1.5cm	0.8cm	-	29.10	

第9図 道路跡出土遺物（2）



第10圖 C区化西部透視圖

700、SD14より古く、SD800よりも新しい。今はD区東半部で部分的に検出されたにすぎず詳細は不明であるが、SX390・710とほぼ同位置で古い順にA・B・Cの3時期の変遷が確認されている。SX390・710に比べ路幅が広く、これまでに総長約130mを検出している。ただし、本道路跡と接続する道路については確認されていない。

B . 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡はC区で新たに18棟、D区で2棟以上検出された。その結果、C区では北半部を中心に少なくとも30棟以上の建物跡が存在していたことが明らかになった。一方、D区については、未精査部分が多く現時点において詳細は不明であるが、多數の柱穴が重複して検出されており、C区同様かなり多くの建物跡が存在していたものとみられる。ここでは、C区北西部で検出された建物跡群とC区北中央部で検出された建物跡群のうち、主なものについて説明する。なお、掘立柱建物跡はいずれも地山面で検出された。

(1) C区北西部建物跡群

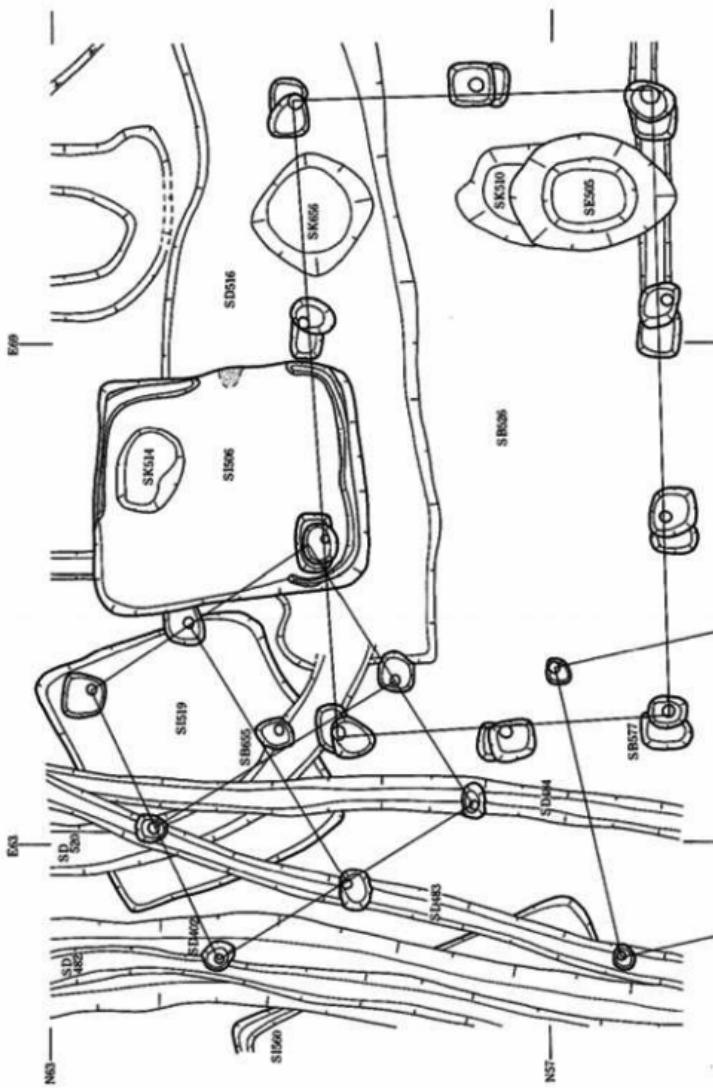
【SB635掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の東西棟で、堆積層2層に覆われる。SB636掘立柱建物跡、SI468堅穴住居跡、SD481・669溝跡などと重複しており、SB636より古く、SI468、SD481・669よりも新しい。柱間寸法は桁行が南側柱列で西から1.9m・1.8m・1.8m、梁行が東側柱列で北から1.7m・1.5mである。建物の方向は北側柱列でE-6°-Nである。柱穴は一辺が約0.5~0.6mの方形で、柱痕跡は径約10cmの円形である。

【SB636掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の東西棟で、南側に廂が付く。堆積層2層に覆われる。また、SB635・640掘立柱建物跡、SI46堅穴住居跡、SD481・669・693溝跡などと重複し、これらよりも新しい。柱間寸法は桁行が身舎北側柱列で西から2.0m・1.8m・2.0m、梁行が西側柱列で北から1.7m・1.8m、廂の出が1.6mである。建物の方向は北側柱列でE-4°-Sである。柱穴は身舎が一辺約0.5~0.6m、廂が一辺約0.4mの方形で、柱痕跡は身舎が径約15cm、廂が径約10cmの円形である。

なお、昨年度検出されたSB434掘立柱建物跡とは建物の方向がほぼ同じで、しかも身舎の桁行方向の柱筋を描えていることから、両建物は同時期のものと思われる。両建物瞬間の距離は約6mを測る。

【SB637掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の東西棟である。SB640掘立柱建物跡、SD479・480・693溝跡、SD578畠状遺構などと重複し、これらよりも新しい。柱間寸法は桁行が北側柱列で西から1.8m・1.7m・1.6m、梁行が東側柱列で北から1.8m・1.7mである。建物の方向は北側柱列でE-3°-Sである。柱穴は一辺が約0.3~0.5mの方形で、柱痕跡は径約10cmの円形である。

第11図 C区中央相接觸野



【SB640掘立柱建物跡】 桁行5間、梁行2間の東西棟である。SB434・636・637掘立柱建物跡、SI477堅穴住居跡、SD693溝跡、SD578畝状遺構などと重複しており、SB434・636・637より古く、SD693・578より新しいが、SI477との新旧関係は不明である。柱間寸法は桁行が南側柱列で西から1.9m・1.7m・1.8m・1.9m・1.7m、梁行が西側柱列で北から2.1m・1.9mである。建物の方向は南側柱列でE-3°-Sである。柱穴は一辺が約0.3~0.4mの方形で、柱痕跡は径約10cmの円形である。

【SB694掘立柱建物跡】 桁行2間、梁行2間の東西棟で、堆積層2層に覆われる。SI477堅穴住居跡、SD470・480・693と重複し、これらよりも新しい。柱間寸法は北側柱列で西から2.7m・2.6m、東側柱列で北から2.2m・2.2mである。建物の方向は西側柱列でE-2°-Nである。柱穴は一辺が約0.4~0.6mの方形で、柱痕跡は径約10cmの円形である。

【SB643掘立柱建物跡】 桁行3間、梁行1間の南北棟である。SB579掘立柱建物跡、SD432溝跡などと重複しており、SB579より古く、SD432よりも新しい。柱間寸法は桁行が東側柱列で北から1.4m・1.3m・1.2m、梁行が北側柱列で北から2.6mである。建物の方向は北側柱列でN-6°-Wである。柱穴は一辺が約0.3m~0.4mの方形で、柱痕跡は径約10cmの円形である。

(2) C区北中央部建物跡群

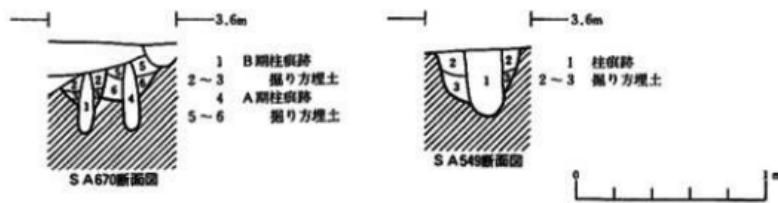
【SB655掘立柱建物跡】 桁行2間、梁行2間の縦柱建物跡で、堆積層3層に覆われる。SB526掘立柱建物跡、SI506・519堅穴住居跡、SD482・483・484・516・520溝跡などと重複しており、SB526、SI506、SD482・483・484より古く、SI519、SD516・520よりも新しい。柱間寸法は桁行が北側柱列で西から1.8m・1.8m、梁行が西側柱列で北から1.7m・1.8mである。建物の方向は北側柱列でE-28°-Nであり、他の建物跡とは方向が大きく振れている。柱穴は一辺が約0.5mの方形で、柱痕跡は径約10cmの円形である。

C. その他の遺構

その他、古代の遺構としては柱列、溝跡、井戸跡、畝状遺構、河川跡、土壌などが多数検出されている。ここでは、これらのうち主なものについて説明する。

【SA549・670柱列】 C区北端でほぼ平行して南北方向に延びる柱列が2条検出された。いずれも布堀り状の堀り方に柱を据えて埋め戻したものである。

SA549は、SB475・680掘立柱建物跡、SD471・547溝跡などと重複し、これらよりも古い柱列である。布堀りは断面が「U」形、上幅約0.4m、下幅約0.25m、深さ約0.2m程である。柱痕跡は多くのものが布堀り底面で検出されたものであり、径10~15cmの円形のものが多い。柱間寸法にはばらつきが認められるが、およそ0.5~0.7m間隔で総長約19m



第12図 柱列断面図

にわたって確認された。柱列の方向はN-11°-Wである。埋土中から土師器が若干出土しているが、いずれも小破片であり全体の器形や時期のわかるものはない。

SA670は、SA549の約8m西で確認された柱列である。SB502・623・629掘立柱建物跡、SD450・461・642溝跡などと重複し、これらよりも古い。総長で約20m確認され、ほぼ同じ場所で一度作り替えられている(A→B期)。柱列の方向はB期でやや西に膨らむが、おおよそSA549と同じ方向をとる。布掘りはB期で断面が「U」形、上幅約0.4m、下幅約0.2m、深さ約0.2m程である。柱痕跡は多くのものが布掘り底面で検出されたものであり、新旧の組み合わせが明らかではないが、径10~15cmの円形のものが多い。また、SA670Aで検出された柱抜き取りの状況を示しているものと思われる。柱間については柱の組み合わせが不明なため明らかではないが、SA549と同程度もしくはこれよりも間隔が狭いものと思われる。遺物もSA549と同様で、僅かに土師器の小破片が出土しているだけである。

なお、SA549の約70m南(今年度多賀城市調査分)で、これの延長とみられる跡(SA5226)が約30mにわたって確認されている。柱痕跡や柱間寸法などに違いが認められるが、SA549についても残存状況が悪いだけで、本来は同様のものと推測される。したがって、これらは少なくとも総長で120m以上を区画する施設と考えられる。ただし、SA670の延長は確認されておらず、平行する2条の関係については不明である。

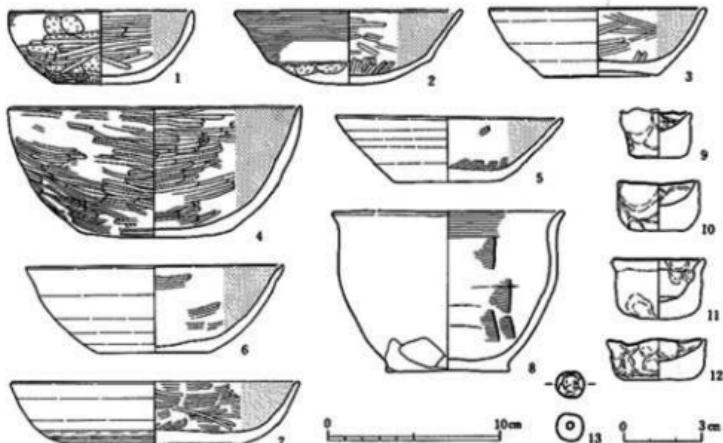
【SD461溝跡】C区東半部からD区中央部にかけて検出された北が開く「コ」の字に巡る溝である。SX750南北道路跡、SB502・581・623・648掘立柱建物跡、SA670柱列、SE566・569・606井戸跡、SD450・589・642溝跡、SD395竪状遺構、SD14・420・555河川跡などと重複しており、SX750、SB502・581・623・648、SE566・569、SD450・642、SD395、SD14・420より古く、SA670、SE606、SD589、SD555よりも新しい。上幅3.0~5.0m、下幅2.0~3.0m、深さ0.4m程の溝で、東西約90m、南北は約30mまで検出した。溝の方向は西辺がN-約7°-Wでやや西に偏しており、東辺はSX700・750南北道路跡と、南辺はSX390・500東西道路跡とほぼ一致する。堆積土は上部で地山砂を含む灰黄褐色土、下部で粘性のある黒

および黒褐色土からなる。堆積土中から土師器坏（第14図1～7）・甕（8）・須恵器坏（14～17・19）・高台付坏（20・21）・甕（18）・壺（22）・瓦（23）・ミニチュア土器（9～12）・土玉（13）などが出土している。

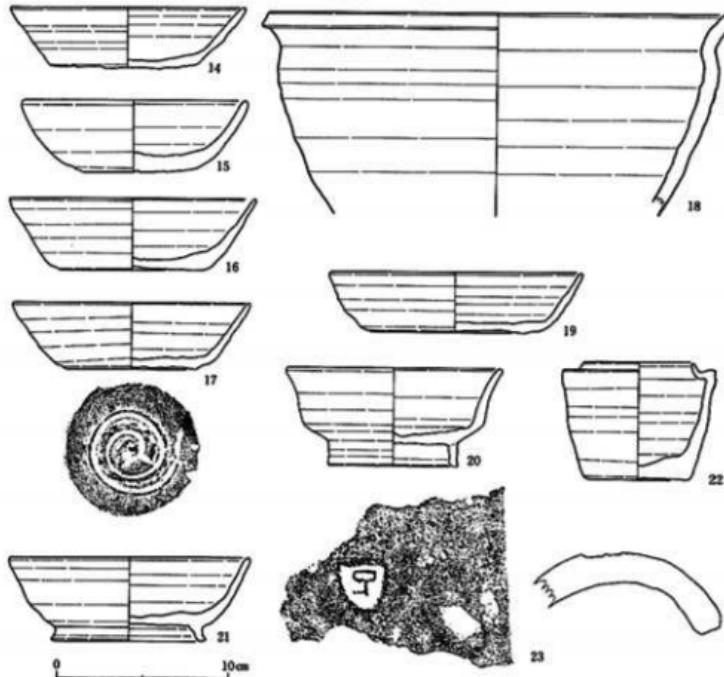
【SE517・5I1井戸跡】C区東半部で検出された。これらは同位置で重複し、しかも古い方のSE517が埋め戻されていることから、SE511はSE517の作り替えと考えられる。SD518・545溝跡と重複し、これらよりも新しい。

SE517は一边が約2.1mの隅丸方形で、検出面からの深さが約1.2mの井戸跡である。井戸枠は検出されず、素掘りもしくは井戸枠を抜き取られた井戸と考えられるが、北に寄って一辺約0.5mの方形の段が形成されていることや、それ以下の壁が水脈である粗砂層に達しているにもかかわらず直立気味に立ち上がっていることから、本井戸跡の井戸枠はSE511を構築する際に抜き取られた可能性が高い。堆積土は下部が機能時の堆積土および掘り方埋土の崩壊土で、上部は人為的に埋め戻されている。上部堆積土中から瓦とウリ科（？）が、下部堆積土中からは土師器坏（第15図1）、横櫛、魚骨や鱗が出土している。

SE511は木組の井戸枠をもつ井戸跡である。掘り方は東西約1.5m、南北約1.8mの長方形で、検出面からの深さは約1.4mあり、底面は粗砂層にまで達している。井戸枠は掘り方のほぼ中央に据えられており、東西約0.4m、南北約0.5mの規模をもつ。構造は長さ約1.0mの板材を1面に1～3枚ずつ重ねながら縦方向に並べ、東西の板材の内側を1本の横桟で保持している。横桟は「目違いほぞ」で組み合わせ、固定しており、一部掘り方の壁にまで



第13図 SD461出土遺物（1）

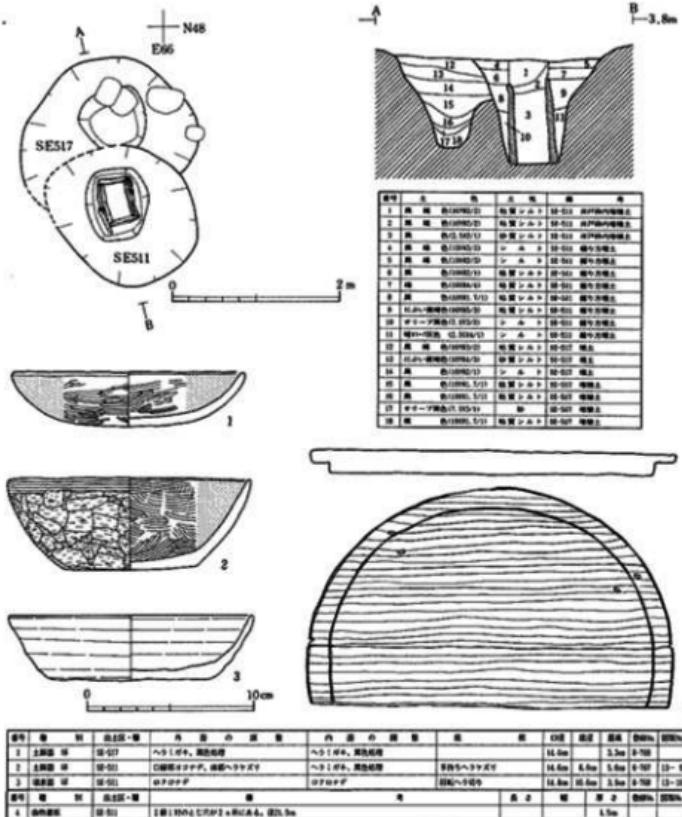


番号	種類	出土場・標	外 周 の 構 造	内 周 の 構 造	底	口 径	底 径	高 度	材質%	備考%
1	土器部 瓶	SD-461	口縁部コナギ、腹縁部V字切欠	ハラミガキ、黄色焼成	手ぬちヘラカズリ→ヘラミガキ	10.8cm	5.7cm	4.3cm	0.42%	12-1
2	土器部 瓶	SD-461	オカラゲ	ハラミガキ、黄色焼成	手ぬちヘラカズリ	13.3cm	6.3cm	0.63%	12-8	
3	土器部 瓶	SD-461	ロフロナゲ	ハラミガキ、黄色焼成	手ぬちヘラカズリ	12.6cm	6.0cm	0.6%	12-3	
4	土器部 瓶	SD-461	ヘラミガキ	ハラミガキ、黄色焼成	手ぬちヘラカズリ	17.0cm	8.8cm	7.6cm	0.62%	
5	土器部 瓶	SD-461	ロフロナゲ	ハラミガキ、黄色焼成	手ぬちヘラカズリ	13.8cm	6.0cm	3.8cm	0.47%	12-2
6	土器部 瓶	SD-461	ロフロナゲ	ハラミガキ、黄色焼成	手ぬちヘラカズリ	15.8cm	6.6cm	5.1cm	0.4%	12-5
7	土器部 瓶	SD-461	ロフロナゲ、底下焼成サギ	ハラミガキ、黄色焼成	手ぬちヘラカズリ	16.8cm	6.6cm	5.1cm	0.47%	12-6
8	土器部 瓶	SD-461	2 種 絞り口付コトケアゲ	口縁部コナギ、底面ヘラカズリ	底面	12.5cm	7.2cm	6.2cm	0.41%	12-11
9	「ムチャク」土器	SD-461	2 種 オカラス	オカラス		4.8cm	3.8cm	3.8cm	0.48%	12-15
10	「ムチャク」土器	SD-461	オカラス	オカラス		4.8cm	2.4cm	2.8cm	0.4%	12-13
11	「ムチャク」土器	SD-461	オカラス	オカラス		5.8cm	4.8cm	3.5cm	0.45%	
12	「ムチャク」土器	SD-461	オカラス	オカラス		5.7cm	4.8cm	2.4cm	0.47%	12-14
13	土 瓦	SD-461	セヌカ?	重合1.1kg	瓦底 L.側	PHW 0.3m	-	0.65	28-7	
14	焼成部 瓶	SD-461	1 種 ロフロナゲ	ロフロナゲ	底面へV切欠	10.7cm	5.5cm	0.62	12-7	
15	焼成部 瓶	SD-461	1 種 ロフロナゲ	ロフロナゲ	底面へV切欠	13.8cm	5.8cm	0.64	-	
16	焼成部 瓶	SD-461	1 種 ロフロナゲ	ロフロナゲ	底面へV切欠	14.4cm	6.2cm	0.65	12-9	
17	焼成部 瓶	SD-461	ロフロナゲ	ロフロナゲ	底面へV切欠	13.8cm	7.0cm	3.8cm	0.62	
18	焼成部 瓶	SD-461	ロフロナゲ	ロフロナゲ		21.4cm	-	-	0.65	
19	焼成部 瓶	SD-461	ロフロナゲ	ロフロナゲ	底面ヘラカズリ	14.8cm	8.0cm	3.5cm	0.65	12-8
20	焼成部 瓶	SD-461	1 種 ロフロナゲ	ロフロナゲ	底面へV切欠	12.8cm	7.0cm	0.65	12-10	
21	焼成部 高台付瓶	SD-461	2 種 ロフロナゲ	ロフロナゲ	底面へV切欠、高台付	14.0cm	9.0cm	3.0cm	0.65	
22	焼成部 瓶	SD-461	ロフロナゲ	ロフロナゲ	底面へV切欠	6.4cm	5.0cm	3.8cm	0.62	12-12
23	丸 瓦	SD-461	凸面ロフロナゲ、底面「瓦」	底面		9.7cm	-	-	0.65	12-2

第14図 SD 461出土遺物（2）

達している。堆積土は井戸枠内部が粘性のある黒色土、掘り方埋土が地山ブロックを多く含む黒～褐色土である。井戸枠内部から土師器壺（第15図2）、須恵器壺（3）、瓦、曲物の蓋板（4）などが出土している。

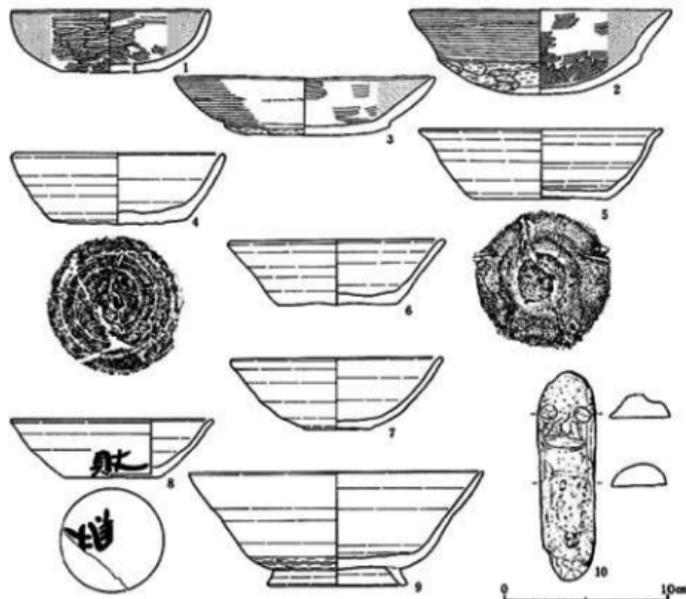
【SD809畝状遺構】D区北東部、SD800河川跡の堆積土上面で検出された南北に平行して延びる小溝群である。D区北東部の竪穴住居跡群より新しく、SD740河川跡によって覆われる。溝は1.0～1.5m間隔で9条確認されており、方向はN-約7°-Eである。溝の長さは最も



第15図 S E511・517井戸跡

長いもので12.5m、短いもので7.5m程である。断面が「U」形で、上幅約40cm、下幅約20cm、深さ約10cmで、堆積土は灰白色火山灰を含む黒褐色土である。

【SD800河川跡】D区の南半から北東部にかけて蛇行しながら流れる河川跡である。昨年度までに、A区北半からC区南半にかけて検出したSD100あるいはSD420河川跡の延長と考えられる。SD555河川跡とほぼ同じ流路をとるが、これよりも浅く幅の広い河川である。D区北東部で検出した竪穴住居跡群を覆っており、またSX390・710・500東西道路跡、SX700・750南北道路跡、SD809畝状遺構はこの河川が埋没した後につくられている。堆積



番号	種	出土地	性	名	内 容 の 説 明	年	寸法	寸法	寸法	寸法	寸法
1	縦穴住居	D-42	2層	ヘリコイド、黑色地質	ヘリコイド、黑色地質	SD-1	22.5cm	4.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
2	縦穴住居	D-42	3層	ヘリコイド	ヘリコイド、黑色地質	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
3	縦穴住居	D-42	3層	ヘリコイド	ヘリコイド、黑色地質	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
4	縦穴住居	D-42	3層	ヘリコイド	ヘリコイド	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
5	縦穴住居	D-42	3層	ヘリコイド	ヘリコイド	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
6	縦穴住居	D-42	3層	ヘリコイド	ヘリコイド	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
7	縦穴住居	D-42	3層	ヘリコイド	ヘリコイド	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
8	縦穴住居	D-42	3層	ヘリコイド	ヘリコイド	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
9	縦穴住居	D-42	3層	ヘリコイド、以下斜面ヘリコイド	ヘリコイド	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm
10	人骨	D-42	3層	頭骨・胸・四肢の骨をいくつも発見している。全骨に白粉が付いていた。頭骨は削り、四肢は削り、頭骨は削り	頭骨	SD-1	22.5cm	5.5cm	2.5cm	2.5cm	2.5cm

第16回 S D 420-800河川跡出土遺物

土中から土師器坏（第16図1～3）、須恵器坏（4～8）、高台付坏（9）、瓦、人形石製品（第16図10）、漆紙文書（第17図）、ウマ・ウシの骨などが出土している。

なお、上記の遺構群が廃絶された後にも、これらを覆ってほぼ周し流路で河川が流れている（SD14・740河川跡）。このことから、この場所は調査区の中でも一貫して標高の低い場所であったと思われる。

〈山王遺跡出土の漆紙文書について〉

東北大学大学院 鈴木拓也

本漆紙文書は、内外黒漆塗りの挽物無高台皿に入れた漆にフタ紙をした状態で出土した。漆器の木地はすでに失われ、表面に塗られていた漆の皮膜だけが残存している。漆皮膜にみられる木地の痕跡から、木地は横木取り・柾目であったと推測される。漆皮膜は2層になっており、体部内面・外面の上層の漆皮膜には布が入っている。このことから、この漆器は、まず木地に下地塗りをし、さらに体部内面・外面に口縁部から布着せをした後、全体に仕上げ塗りを施したものと推測される。

漆紙はほぼ円形で、直径は14～15cm程度である。周縁部に紙が二重になっている部分があるが、これはフタ紙をする際に紙の層縁部を内側に折り込んだためかと思われる。漆が付着しているのは文書の裏面で、文字は文書の表から正字で読み取ることができる。書体は行書で、墨の残存状況はかなり悪い。

〈訛文〉

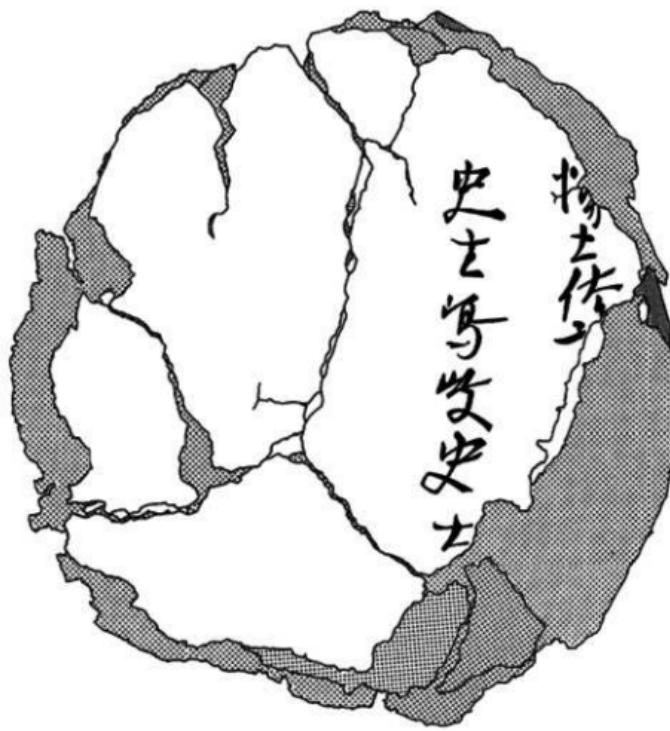
博士□□□

史生嶋岐史□□

文字は2行・10文字あり、1行目が欠損しているのに対して、2行目の左側は余白となっている。国博士と史生が名を連ねており、文書末尾の署名の部分であった可能性もある。

「博士」は国博士で、令制では医師とともに国ごとに1人ずつ置かれ、国学において郡司の弟子から選ばれた学生に経学を教授する（職員令国博士医師条）。ただし実際には国衙の職務に携わる場合もあった（桃裕行『上代学制の研究』、1947年）。国博士は当該国内または傍国から任用する定めであったが（選叙令国博士条）、早くから人材難であつたらしく、大宝3年（703）には適任者がいない場合中央から補任することが定められている（『続日本紀』大宝3年3月丁丑条）。さらに養老7年（723）には按察使の置かれている国のみに国博士を置くこととし（『続日本紀』養老7年10月庚子条）、按察使制度が実質を失った神亀5年（728）には3・4カ国に1人の国博士を置くように再度定められるが（『続日本紀』神亀5年8月壬申条）、結局宝亀10年（779）になって再び国ごとに1人を置くこととなる。

(『続日本紀』宝亀10年閏5月丙申条)。このように国博士の任用制度には変遷があるが、陸奥国は按察使の置かれた国であるから、如上の変遷に関係なく一貫して国博士が置かれていたと考えられる。また大宝3年の措置から考えれば、本漆紙文書の「博士」も中央から派遣された国博士である可能性が高い。なお陸奥の国博士は、胆沢城漆紙文書第7号にもみえている(『胆沢城』昭和57年度発掘調査概報、1983年)。



第17図 S D 800河川跡出土漆紙文書

「史生」は国司四等官の下に置かれた下級書記官で、国司と同じく中央から派遣される。職員令では国の等級にかかわらず一律に3人と定められているが、神亀5年（728）に大国4人・上国3人・中下国2人に改められ（『続日本紀』神亀5年8月壬申条）、さらに宝亀10年（779）には大国5人・上国4人・中国3人・下国2人に改められる（『続日本紀』宝亀10年閏5月丙申条）。陸奥国は大国であり、陸奥国の官員を定めた『類聚三代格』延暦17年（798）6月28日太政官奏でも史生は5人となっている。本漆紙文書の場合、出土遺構の年代は8世紀後半とされており、文書の作成年代もそのころに求められるとすれば、文書が作成された時の史生の人数は4人が5人となるが、そのいずれであるのかは明らかにし難い。

「鳩岐史」は『新撰姓氏録』右京諸蕃下に「鳩岐史 出レ自=高麗国能訥王一也」とある渡来系の氏族であるが、実例は『統日本後紀』承和2年（835）9月乙卯条の「外從五位下鳩木史真」ただ一人である。

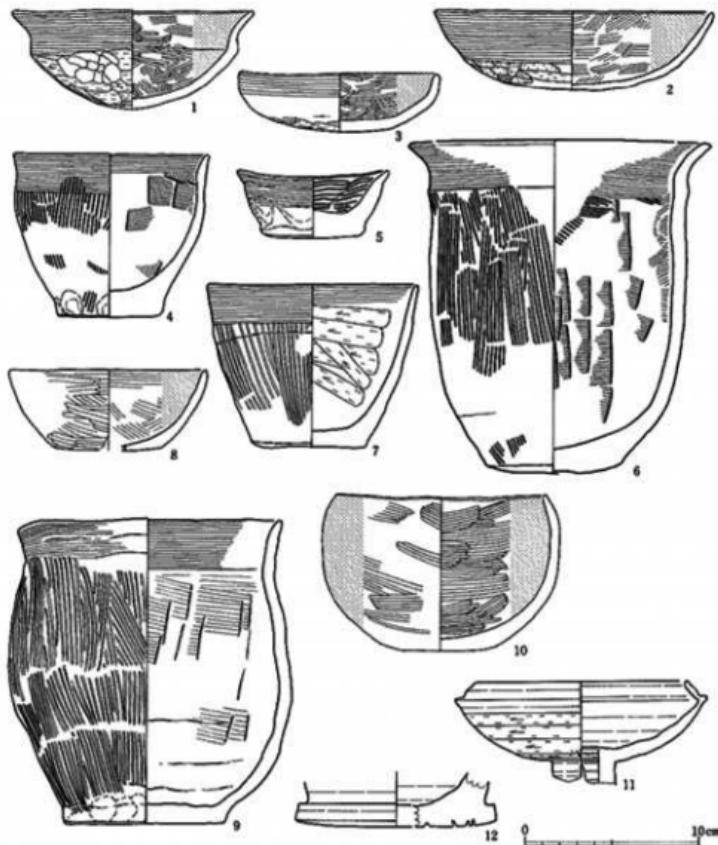
3. 中・近世

井戸跡、溝跡、土壌などが検出された。これらの多くは他の遺構との重複関係や堆積土の特徴により確認したもので、古墳時代や古代に比べ遺構の数は少ない。また、この時期に該当する遺物も極めて少なく、表土出土の遺物も含め、かわらけ（第20図7～12）や中世陶磁器の小片、板碑（？）の破片、古銭（大觀通宝）などがあるだけである。

4. その他の遺物

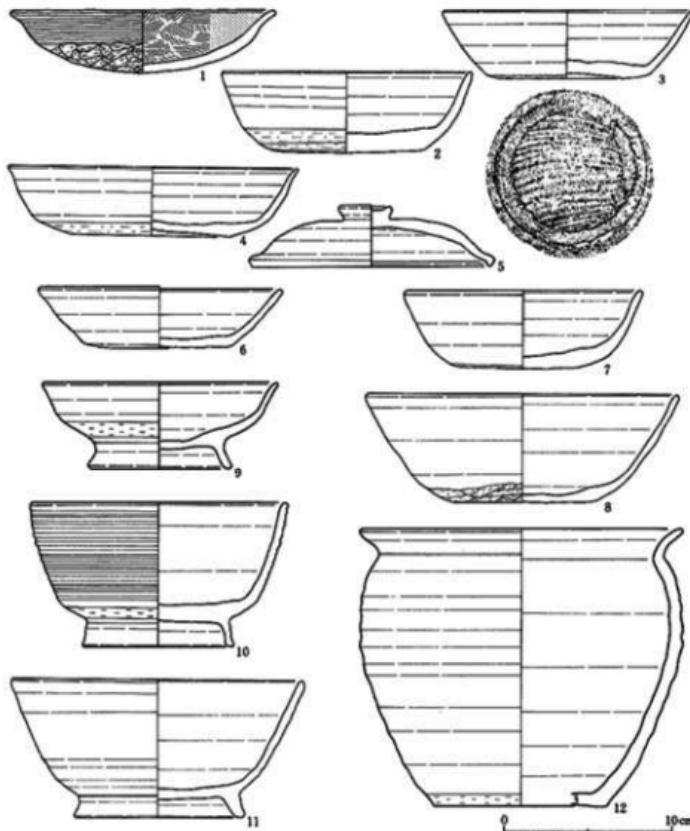
その他の遺構や表土などからも数多くの遺物が出土している。土師器には壺（第18図1～3・8・10、第19図1、第20図1・2）・甕（第18図4・6・7・9、第19図12）・瓶などがある。須恵器には壺（第19図2～4・6～8、第20図4・5）・高台付壺（第19図9～11）・高壺（第18図11）・蓋（第19図5）・摺鉢（第18図12）・甕がある。赤焼土器には壺（第20図3・6）・高台付壺がある。瓦には平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦（第20図13～15）がある。その他に綠釉陶器・灰釉陶器が出土している。

また鉄製品では鐵（第21図8・9）が出土している。土製品では土錘（第21図4～6）・ミニチュア土器（第18図5）が出土している。石製品では鎧帶（第21図7）・砥石（第21図3）が出土している。木製品で曲物および曲物の蓋板（第21図1）や底板（第21図2）が出土している。その他、ウマ・ニホンジカの骨が出土している。



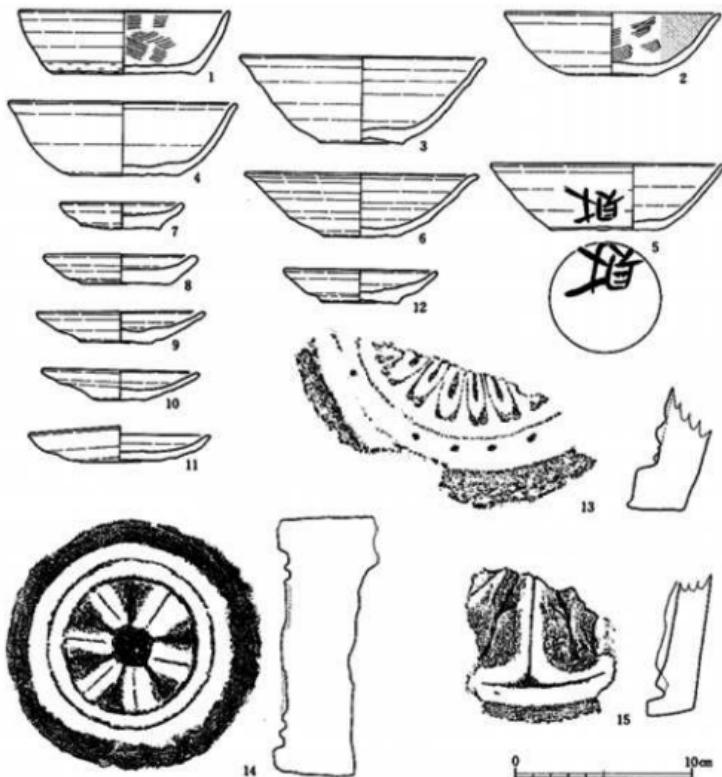
番号	種	出土位置	内 容 の 概 要	内 容 の 詳 紹	寸	幅	高さ	厚さ	備考	
1	土器底	II-62	リコリグ	ヘリコリグ、黒色地刷毛	手筒セラミカ瓦	14.0cm	5.5cm	0.7cm	H-3	
2	土器底	II-58	リコリグ	ヘリコリグ、黒色地刷毛	手筒セラミカ瓦	25.5cm	4.7cm	0.7cm	H-2	
3	土器底	II-58	リコリグ	ヘリコリグ、黒色地刷毛	手筒セラミカ瓦	11.7cm	5.5cm	0.7cm	H-1	
4	土器底	II-59	1 箇	リコリグコナド、赤褐色ハサメ、赤下部オサス	リコリグコナド、黒色セラミカ	木製盤	21.3cm	5.8cm	0.5cm	H-5
5	土器底	II-59	2 箇	リコリグコナド、赤下部オサス	リコリグ		6.8cm	4.0cm	0.7cm	H-2
6	土器底	II-59	2 箇	リコリグコナド、赤褐色ハサメ	リコリグコナド、赤褐色ハサメ		17.4cm	7.0cm	2.0cm	H-6
7	土器底	II-61	1 箇	リコリグコナド、赤褐色ハサメ	リコリグコナド、黒色セラミカ瓦	木製盤	12.3cm	6.7cm	0.5cm	H-5
8	土器底	II-62	1 箇	ヘリコリグ、黒色地刷毛	ヘリコリグ、黒色地刷毛	ヘリコリグ	11.4cm	4.7cm	0.7cm	H-4
9	土器底	II-64	1 箇	リコリグコナド、赤褐色ハサメ、赤下部オサス	リコリグコナド、黒色セラミカ	木製盤	15.2cm	8.4cm	1.8cm	H-5
10	土器底	II-64	2 箇	ヘリコリグ、黒色地刷毛	ヘリコリグ	ヘリコリグ	11.8cm	5.5cm	0.7cm	H-3
11	土器底	II-72	1 箇	リコリグコナド、赤下部オサス	リコリグ		14.0cm	-	0.7cm	H-5
12	漆器底	II-75-76(2枚)	リコリグ	リコリグ	漆筒瓦	-	1.5cm	0.7cm	H-12	

第18図 その他の遺構出土遺物（1）



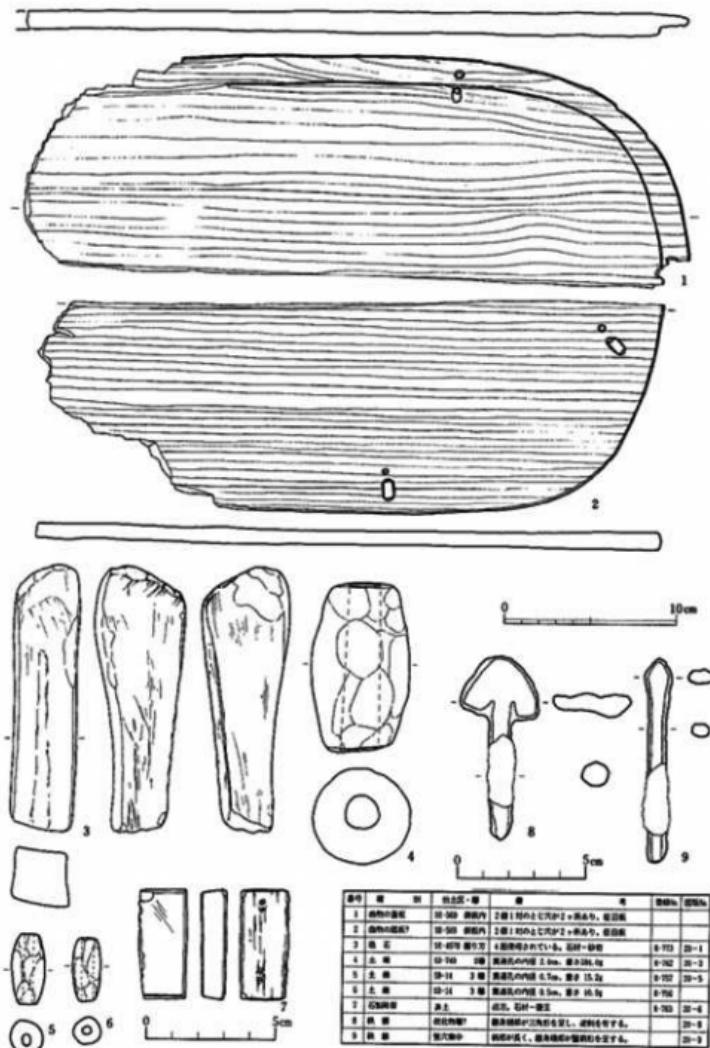
番号	種別	出土年・場所	外観の特徴	内面の特徴	底	口径	底径	高さ	厚さ	備考
1	土器	10-1001 2層	ヨリナギ	ヘリ(1)丸、底面凹凸	手ぬきヘリナギ	35.5cm	3.8cm	7.0cm	0.7cm	1
2	土器	10-1001 1層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	34.8cm	5.3cm	4.7cm	0.7cm	4
3	土器	10-1001 2層	ヨリナギ	ヨリナギ	手ぬきヨリナギ	34.8cm	5.7cm	4.1cm	0.7cm	3
4	土器	10-1001 2層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	37.3cm	5.6cm	4.1cm	0.5cm	5
5	土器	10-1001 2層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	34.4cm	5.7cm	4.0cm	0.7cm	1
6	土器	10-1001 1層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	34.0cm	5.8cm	3.4cm	0.7cm	2
7	土器	10-1001 1層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	34.3cm	7.3cm	4.6cm	0.7cm	0
8	土器	10-1001 2層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	35.0cm	8.0cm	5.5cm	0.7cm	1
9	土器	10-1001 1層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	35.0cm	8.0cm	5.5cm	0.7cm	1
10	土器	10-1001 2層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	34.0cm	8.0cm	5.5cm	0.7cm	1
11	土器	10-1001 2層	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	35.0cm	8.0cm	5.5cm	0.7cm	1
12	土器	10-1001-107	ヨリナギ	ヨリナギ	ヨリナギ	35.2cm	10.4cm	9.1cm	0.7cm	9

第19回 その他の遺構出土遺物（2）



番号	種別	出土地・層	片底の測量	内底の測量	底	口径	底径	高さ	総高さ	総底径	
1	土器底	10-402	ロフロナゲ、底下部横縞テカリ	ハラミガラ、腹内横縞	田舎町A-17号	12.0cm	9.5cm	2.5cm	8-76	11-3	
2	土器底	10-786 1層	ロフロナゲ	ハラミガラ、腹内横縞	田舎町A-17号	12.5cm	9.5cm	3.0cm	8-76	11-3	
3	小輪土器	10-	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	14.0cm	4.5cm	4.5cm	8-72	11-3	
4	土器底	10-858 2層	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	13.0cm	6.0cm	4.5cm	8-73	11-3	
5	土器底	10-503	ロフロナゲ、腹壁「鉤」	ロフロナゲ	田舎町A-17号	12.0cm	9.5cm	2.5cm	8-76	11-3	
6	小輪土器	10-14	3層	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	13.0cm	4.2cm	3.0cm	8-75	11-4
7	小輪土器	10-788	5層	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	1.0cm	4.0cm	1.0cm	8-72	11-3
8	小輪土器	10-734 1層	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	8.0cm	5.0cm	1.5cm	8-73	11-3	
9	小輪土器	10-749 1-2層	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	25.0cm	4.5cm	1.0cm	8-76	11-3	
10	小輪土器	10-833	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	8.0cm	5.0cm	1.0cm	8-76	11-3	
11	小輪土器	10-837	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	13.0cm	4.0cm	2.0cm	8-77	11-3	
12	小輪土器	10-837	ロフロナゲ	ロフロナゲ	田舎町A-17号	8.0cm	4.5cm	1.0cm	8-76	11-3	
13	研磨瓦	10-597	2層	腹内横縞					8-76	10-12	
14	研磨瓦	10-864 1層	腹内横縞(幅14.3cm)						8-77	10-12	
15	研磨瓦	表土	腹内横縞						8-76	10-12	

第20図 その他の遺構出土遺物 (3)



第21図 その他の遺構出土遺物 (4)

IV 考察

今回の調査では、前章で述べたとおり、古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が多数発見された。ところで、インターチェンジ部分（八幡地区）の調査としては、今回がその第4次調査にあたる。これまでにも多くの遺構が検出されており、これらの遺構群については古墳時代が中期（南小泉式）と後期（栗団式）の2期、古代が道路の有無や遺構群の方向性などによって5段階（I a・b、II a・b、III段階）に大別され、このほか中世および近世の遺構も明らかになっている（赤澤；1990、菅原・佐藤；1991、千葉；1991）。

以下、今回検出された主な遺構の特徴および年代について検討を加える。

1. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては堅穴住居跡、溝跡、河川跡などがある。これらはC区北東部からD区北半部にかけて集中し、いずれも地山面で検出された。かなり削平されており、堅穴住居跡は掘り方埋土で確認されたものも多い。また、D区については未精査の遺構が多く、遺構および遺構群の特徴について詳述することはできない。ただし、堅穴住居跡についてみれば35軒確認された。年代的には、昨年度C区北東部で検出されたSI491が7世紀前半に位置付けられているが（菅原・後藤；1991）、今回検出された堅穴住居跡についても、

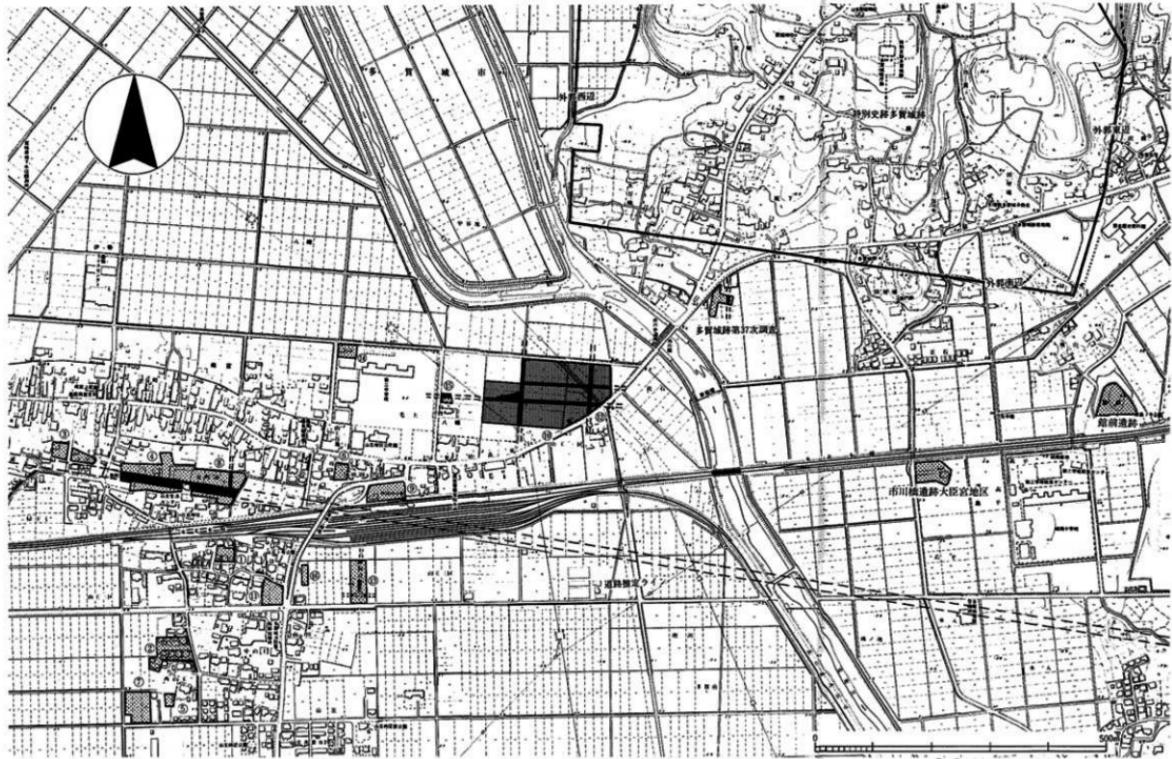
精査したSI821をはじめ、表土や住居のプラン確認の際出土した遺物からみて、大きくは違わない古墳時代後期のものと思われる。住居の特徴としては、平面プランが正方形を呈するものが多く、その一辺にカマドをもつという点では後続する古代のものと共通している。これに対して、堅穴住居跡が集中して群（C区北東部～D区北西部、D区北中央部、D区北東部）をなし、しかも同位置でかなりの重複がみられることや堅穴住居跡相互で近接した位置関係にあること、またこれらの規模や方向に齊一性が認められないことなどは、古代のものとは異なるこの時期の特徴といえる。

2. 古代の遺構

古代の遺構としては道路跡、掘立柱建物跡、柱列、井戸跡、溝跡、畝状遺構、土壙など多数検出された。ここでは、道路跡および区画施設（溝跡・柱列）について検討を加える。

(1) 道路跡

今回、SX390・710東西道路跡、SX750・700南北道路跡、SX500東西道路跡の5条が検出された。いずれもこれまでに見つかっている道路跡の東および北延長部分にあたり、SX390・710とSX750・700はD区中央東寄りで交差する。道路の方向はSX750・700が多賀城跡政府中軸線におおよそ平行し、SX390・710がこれにほぼ直行する（註1）。路幅は



第22図 山王通周辺の道路構造

①-⑧は多賀城市教育委員会による調査次数を示す。

SX750・700が約4mでほぼ一定しているのに対して、SX390・710は1.5～4m程の範囲で場所によるばらつきがあり、一定していない。道路の変遷については、側溝の作り替えからみてSX750・700では灰白色火山灰を挟んでA→D期の4時期、SX390・710ではA→C期の3時期認められ、後者は灰白色火山灰降下以後機能していない。また、SX390・710とほぼ同位置でこれよりも古いSX500がA→C期の3時期にわたって変遷しており、この場所においては都合6時期にわたって存続していたことが明らかになった。ただし、SX500については、路幅が6～8mと他の道路跡に比べ広いことや、これと直交する同時期の南北道路跡が確認されていないことなどから考えて、後続する道路跡とは異なる計画のものであった可能性が高い。道路の存続年代はいずれも平安時代前半頃に位置付けられ、相互に接続するSX390・710・750・700については、C期の側溝や路面上に灰白色火山灰が堆積していることから9世紀後半～10世紀前半を中心とした時期が想定される。SX500についても、後述するように8世紀後半のSD46Iより新しいことから、現時点では奈良時代まで遡らないものと考えておきたい。

ここで、今回検出された道路跡とこれまでに多賀城跡周辺で見つかっている道路跡との関係をみてみると、南北道路跡については昨年度検出したSX400（菅原・佐藤;1991）およびSX5150（千葉;1991）がSX750・700の約1町（＝約109m）西、多賀城跡第37調査（白鳥;1981）の道路跡が約2町東に位置する。また、1町区画には合わないものの、東町浦地区（相沢;1990、多賀城市第8次調査）でもこれらと平行する同時期（註2）の南北道路跡が検出されている（註3）。一方、東西道路跡については、SX390・710とSX300（赤澤;1990）が平行しているものの、これらは1町区画に合わない道路であり、しかもB区西端で三叉状に接続しているなど南北道路跡に比べ計画性に乏しいものである。また、東町浦地区で検出されている幅12mの東西道路跡は、これらと同時に機能していたと考えられるが、多賀城跡外郭南辺を基準としたものと推定されている（相沢;1990）しかも、南辺の約5町南に位置しており、上記の道路跡とは異なる計画のものであった可能性が高い。こうした状況については、①地形的な制約、②場の使われ方に間わる道路の必要性、あるいは③千刈田地区で想定された国守の館（石川・相沢;1991、多賀城市第9次調査）との関係など、さまざまな要因が考えられるが、現段階においては明らかではない。政庁中軸線および外郭南辺といった異なる基準の道路が同時に存在していたことの解釈も含め、今後の課題である。

なお、この時期、山王遺跡千刈田地区（石川・相沢;1991）、館前遺跡（高倉;1980）、市川橋遺跡大臣宮地区（高倉・千葉・相沢;1984）に国司クラスの上級官人の館が出現する。また、市川橋遺跡高平地区（高野;1974、滝口・相沢;1985）、水入地区（森;1985）、

多賀城跡第37次調査区（白鳥;1981）、山王遺跡東町浦地区（相沢;1980）、西町浦地区（高倉;1981）、新田遺跡北寿福寺地区など集落の数も全体的に増加する傾向にあるが、こうした状況は城外の上記にみられるような計画的な道路の設置と密接な関わりをもっていたと考えられる。これらのことから、少なくとも多賀城南西部の東西に延びる自然堤防上は、この時期に最も国府域としてのにぎわいを見せるようになったと推定される。

註1 これまで、調査区内で見つかった道路跡は多賀城跡外郭南辺を基準として構築され、SX300は東町浦地区（多賀城市第4・8次調査）で検出された幅12mの東西道路跡の約2町北に位置するものと考えられてきた（赤澤;1990、菅原・佐藤;1991、千葉;1991）。ところが、今回の調査および多賀城市第15次調査（八幡地区）で検出された道路跡延長部分の成果を踏まえ再検討した結果、これらは多賀城跡外郭南辺ではなく政府中軸線を基準としたもので、東町蒲地区検出の東西道路跡とは基準が異なること明らかになった。

2 本地區以外で検出された道路跡についても2~4時期の変遷が認められ、しかも側溝堆積土あるいは路面上で灰白色火山灰土の堆積が確認されていることから、これらはほぼ同時期に機能していたものと思われる。

3 この他、山王三区（多賀城市第13次調査）と八幡地区（多賀城市第13次調査）でも、部分的にはあるが、道路跡が検出されている。山王三区では東西および南北道路跡が検出されているが、いずれも道路の方向等不確定要素が多く、これまでに見つかっている道路跡との関係は不明である。ただし、南北道路跡については側溝堆積土に灰白色火山灰を含んでおり、他の道路跡と同時に機能していた可能性が高い（多賀城市埋蔵文化財調査センターの石川俊英氏の御教示による）。また、八幡地区ではSX300の西延長と南に曲がるコーナーが検出されているが、これと交差する道路跡や接続する南北道路跡の方向、SX750・700との位置関係などについて明らかでない。

(2) 区画施設

今回、道路構築前の区画施設として「コ」の字に巡る溝1条（SD461）と柱列2条（SA549・670）が検出された。

SD461溝跡は東西約90m、南北30m以上を区画する施設で、道路跡と同様に多賀城跡政府中軸線を基準としている。年代的には、天平宝字6年（762）の具注歴および天平12年（740）の戸口損益帳などの漆紙文書（多賀城市第10次調査）を出土したSD180溝跡よりも新しく、SX500東西道路跡よりも古いことから（SD180→SD420・100河川跡→SD461→SX500）、8世紀後半頃のものと考えられる。これまでの調査で、道路構築前（奈良時代）についても掘立柱建物跡や竪穴住居跡などの方向や規模などを規制した計画的な「地割り」の存在が想定されてきたが（赤澤;1990）、今國その具体的な「地割り」の一端が明らかになった。ただし、SD461は本来方形をなすものと思われるが、区画溝内部に構築された異体的な施設やその性格などについては、今後の課題である。

柱列は布掘り状の掘り方に注をほぼ等間隔に据えたもので、2条（SA549・670柱列）検出された。これらは約8mの幅で平行する位置関係にある。残存状況が悪いものの、SA549の南延長上（今年度多賀城市調査分）で検出された堀跡

（SA5226）（註1）と同様のものと思われ、SA549についてみれば少なくとも総長で120m以上を区画する施設である。方向は

北で西に大きく振れており、多賀城跡政庁中軸線を基準とした後続するSD461や道路跡、掘立柱建物跡、堅穴住居跡などの遺構群とは異なっている。年代的には、SD461より古いことから8世紀以前のものと思われるが、その上限については明らかではない。ただし、こうした方向の振れる遺構はこれまでにも検出されており、いずれも重複関係からみて古代に属する遺構の中では最も古い段階に位置付けられている（菅原・後藤：1991）。また、今回C区北中央部で検出されたSB655掘立柱建物跡も同様で、古墳時代後期のS1519より新しく、奈良時代のSI506よりも古いことなど、古代の遺構としては最も古い段階のものである。これらのことから、柱列を含めこれら西に方向が振れる遺構群の上限は、少なくとも多賀城創建前にまで遡る可能性が高い。なお、本柱列の性格については、平行する2条の柱列の関係が明らかでないことや柱材の大きさおよび検出状況、柱間寸法、全体の規模などさらに検討を要するが、上記のごとくSA5226との関係より、現段階においては解説と考えておきたい。これらについては、調査区北側の延長部分を検出した段階で改めて検討を加えたい。

註1 SA549の約70m南（今年度多賀城市調査分）で検出されたSA5226は、SA549・670と同様に布掘り状の掘り方に径10～15mの柱材を据えて埋めもどしたものである。柱間寸法はかなり密接しており、残りの良い場所では約0.2mの等間隔で検出されている（多賀城市埋蔵文化財調査センターの千葉孝弥氏の御教示による）。

V まとめ

①古墳時代中期と後期の遺構・遺物がまとまって発見され、多賀城創建以前に長期にわたって集落が営まれていたことが明らかになった。ただし、これらの集落が多賀城創建前後でどのように変化したのかについては不明である。堀跡や溝跡、掘立柱建物跡など方向の振れる遺構群の具体的な年代や性格などの問題も含め、今後の課題である。

②道路構築前の区画施設が発見された。多賀城跡政庁中軸線と方向がほぼ一致しており、これまで明らかではなかった道路構築前の異体的な「地割り」の一端を示しているものと思われる。

③平安時代の遺構としては、多賀城跡政庁の中軸線と方向がほぼ一致する一町区画の道路跡をはじめ、掘立柱建物跡、井戸跡、畑跡などが発見された。これによって、多賀城周辺における計画的な地割りの存在が明らかになるとともに、宅地内の土地の使い分けなどの具体的な生活の様子が明らかになってきた。

引用参考文献

- 相沢清利（1990）；「山王遺跡—第8次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第22集 多賀城市教育委員会
- 赤澤靖章（1990）；「山王遺跡—仙塙道路建設関係遺跡八幡地区調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第138集 宮城県教育委員会
- 石川俊英・相沢清利（1991）；「山王遺跡—第9次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第24集 多賀城市教育委員会
- 後藤秀一・柳沢和明（1991）；「古代東北の官衙」『月刊文化財』335号
- 白鳥良一（1981）；「第37次発掘調査—多賀城跡一」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1980
- 菅原弘樹・陸藤則之（1991）；「山王遺跡—仙塙道路建設関係遺跡平成2年度発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第141集 宮城県教育委員会
- 鈴木真一郎（1988）；「山王遺跡・市川橋遺跡の発掘調査について」『昭和63年宮城県内発掘調査成果発表要旨』宮城県教育委員会
- 高倉敏明（1980）；「館前遺跡—昭和54年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第1集 多賀城市教育委員会
- 高倉敏明（1981）；「山王遺跡—山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第2集 多賀城市教育委員会
- 高倉敏明・千葉孝弥・相沢清利（1984）；「市川橋遺跡調査報告書—昭和58年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第5集 多賀城市教育委員会
- 多賀城市史編纂委員会（1991）；「古代の多賀城」『多賀城市史—第4巻考古資料』
- 高野芳弘（1974）；「第22次発掘調査—多賀城跡一」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1973
- 滝口車・相沢清利（1985）；「市川橋遺跡調査報告書—昭和58年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第5集 多賀城市教育委員会
- 千葉孝弥（1991）；「山王遺跡—第10次発掘調査報告書」『多賀城市文化財報告書』第27集 多賀城市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所（1984）；「木器集成図録—近畿古代篇」『奈良国立文化財研究所史料』第27集

写 真 図 版

遠野造景（西より）



調査区近景
(北東より)



図版1



調査区近景（北より）



D・F区調査区全景

図版 2

C区調査区全景



C区北西部連續群(南より)

SB434
SB637
SB640



C区北中央部連續群(南より)

S1506
SB526
SB655

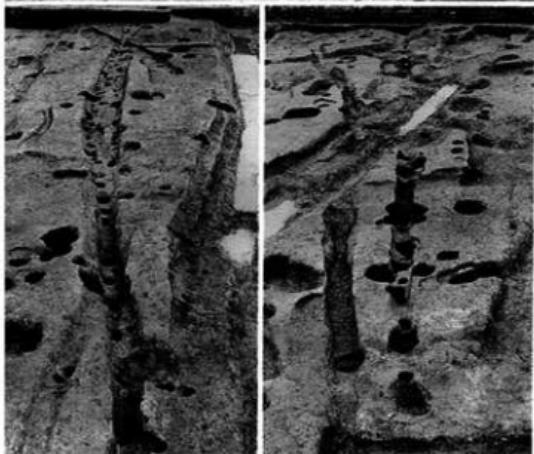


図版 3

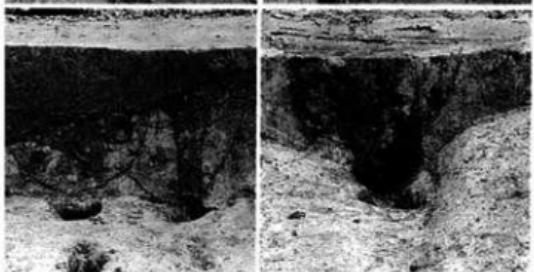
SA549,670柱列(南より)



右・SA549柱列
左・SA670柱列



右・SA549柱列断面
左・SA670柱列断面

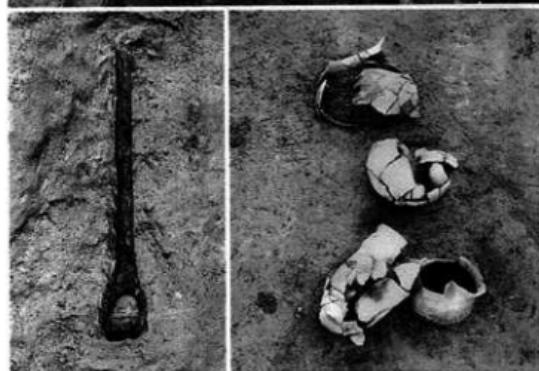


図版4

SD555河川跡(西より)



左・鉛出土状況
右・土器出土状況



図版5



D - F区道路跡
(北より)

SX300
SX390
SX700
SX710
SX750



D区道路交差点部分
(西より)

上・SX710
下・SX390
左・SX750
右・SX700

D区北東部遺構群



S 1821 A住居跡
(南より)



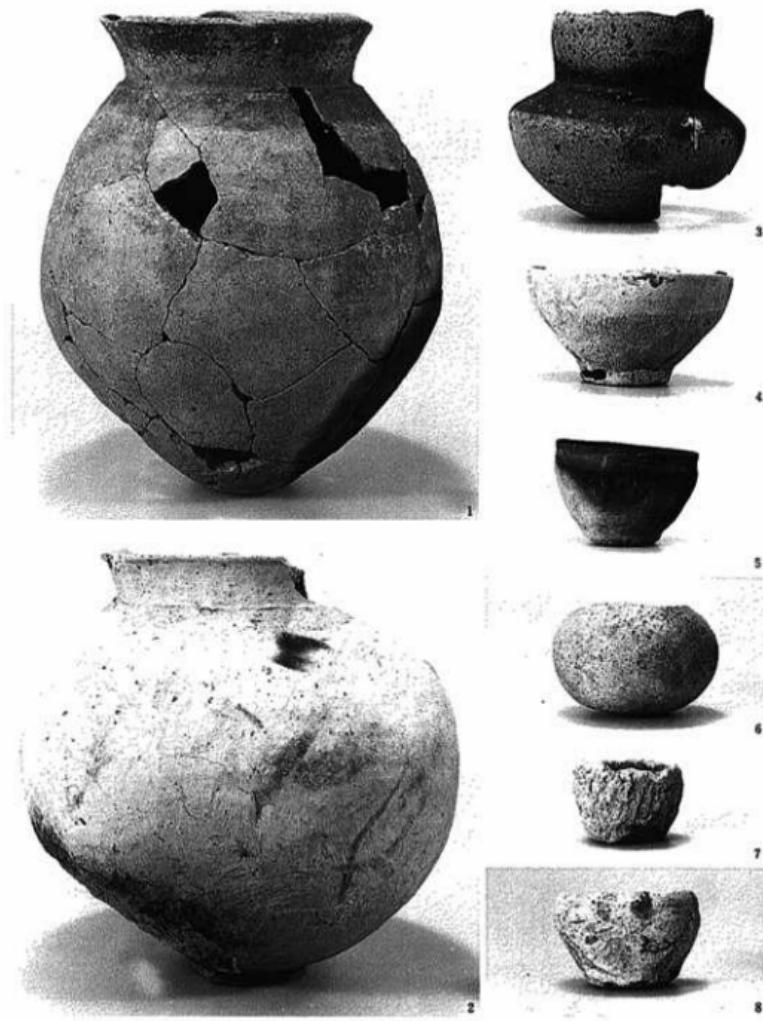
図版 7



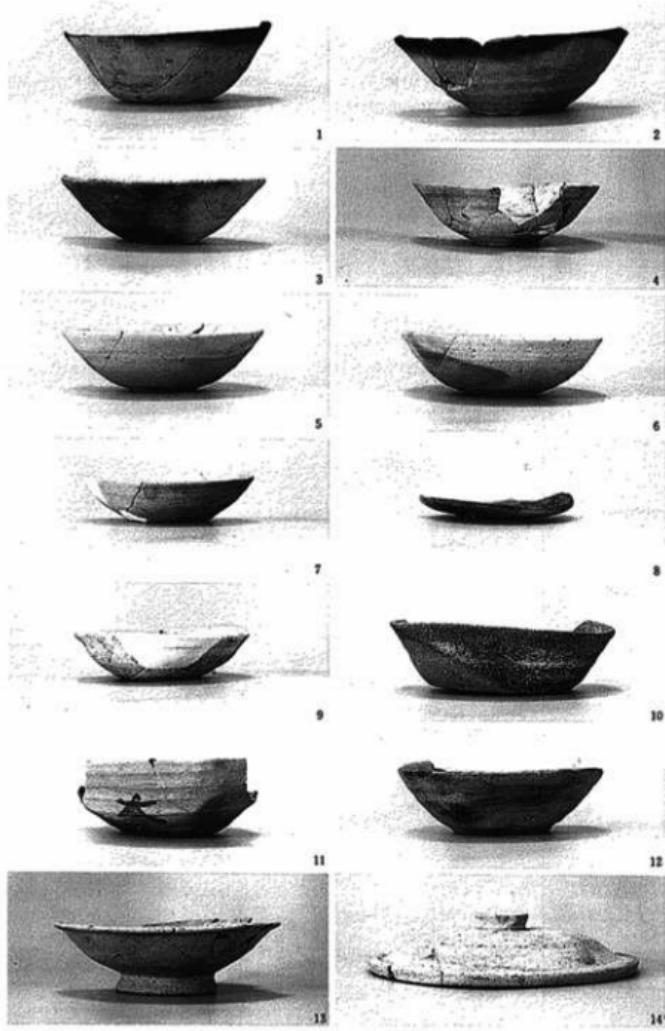
図版 8



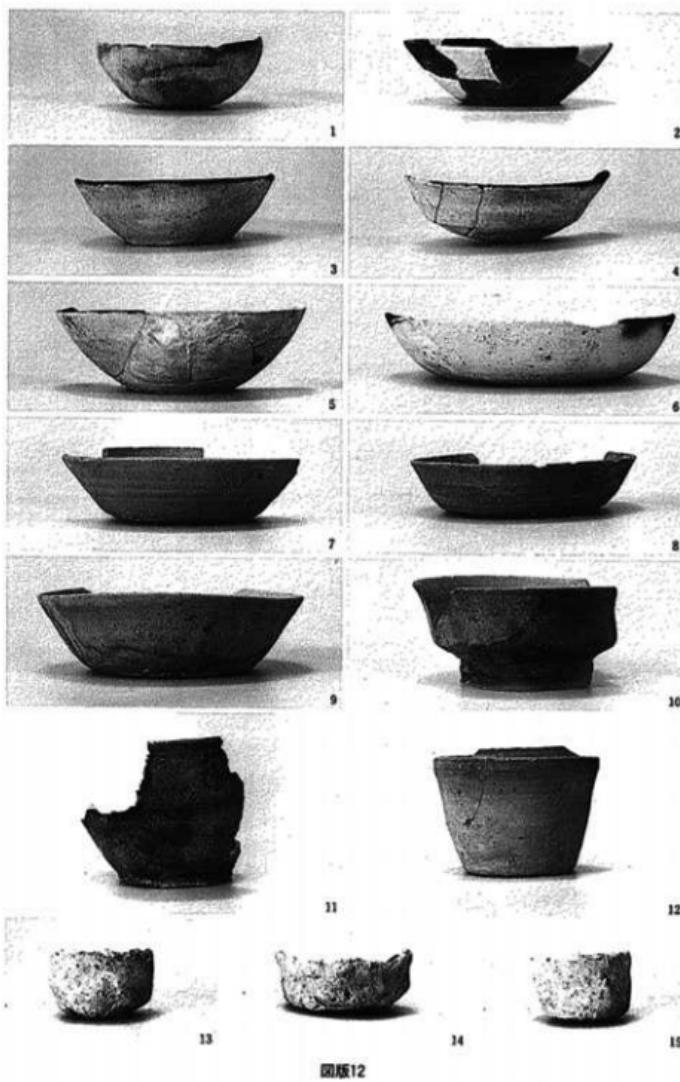
圖版 9



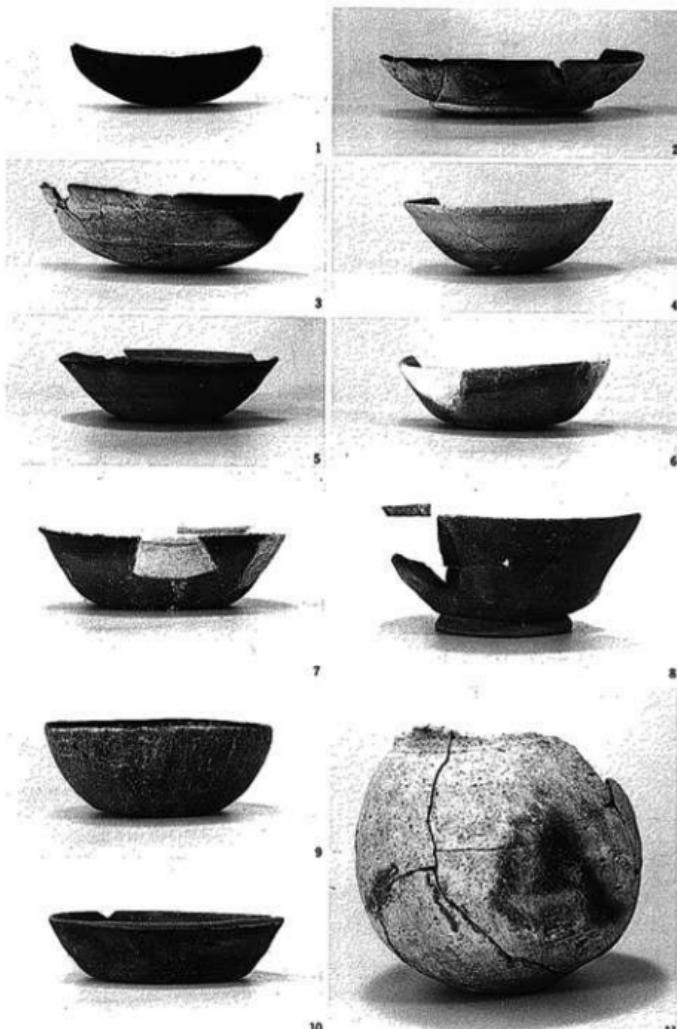
图版10



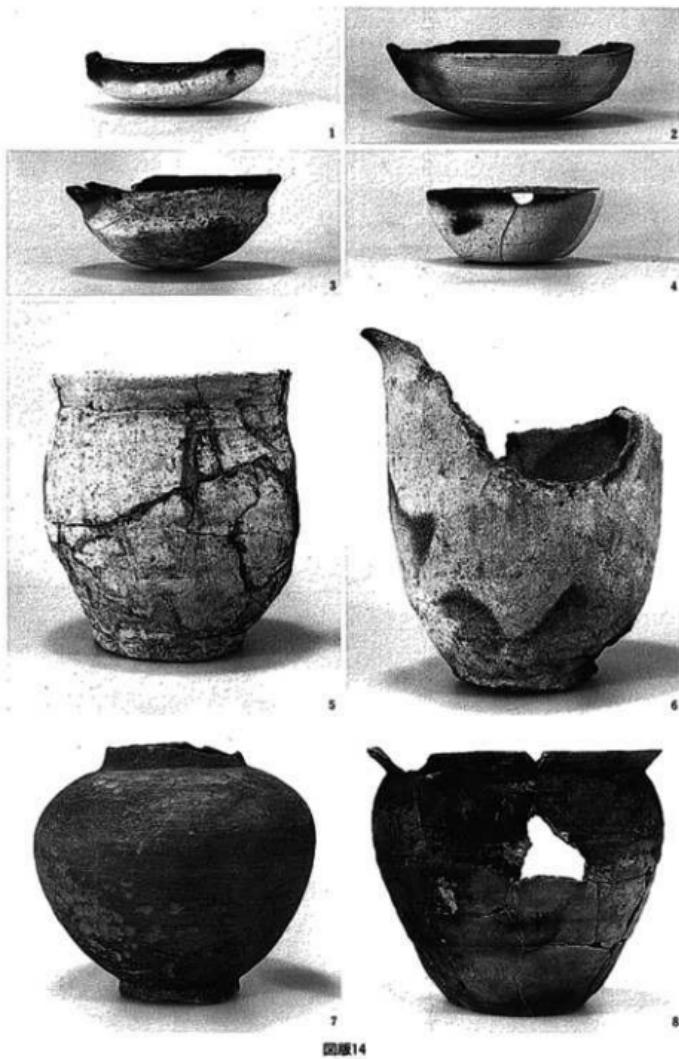
圖版11



圖版12



圖版13



图版14



1



2



3



4



5

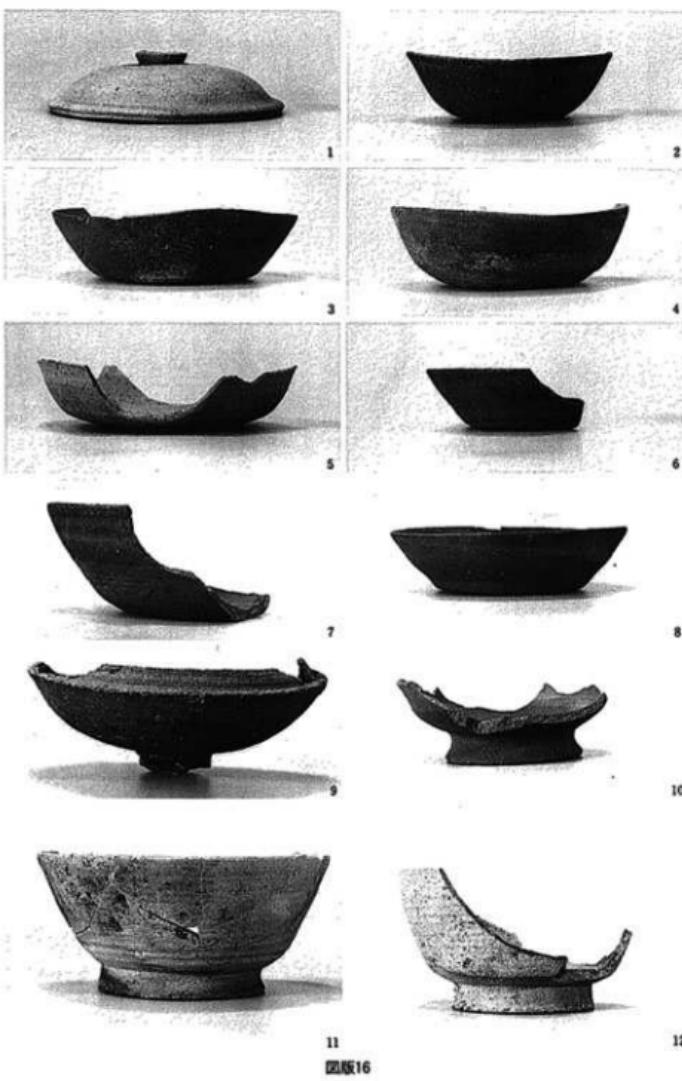


6



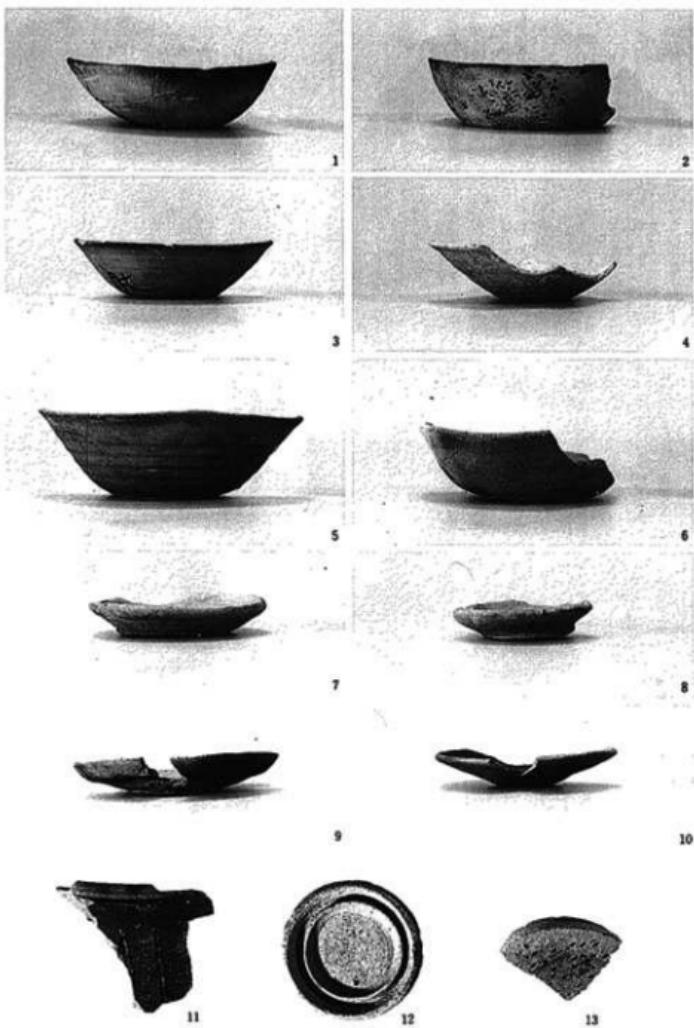
7

图版15

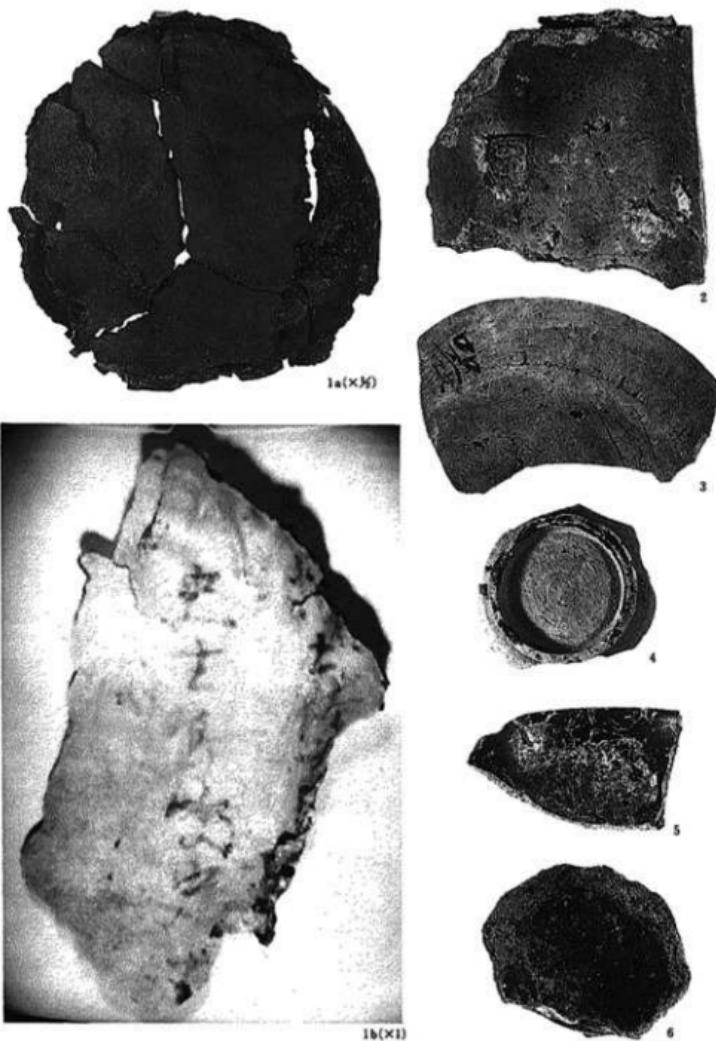


11
12

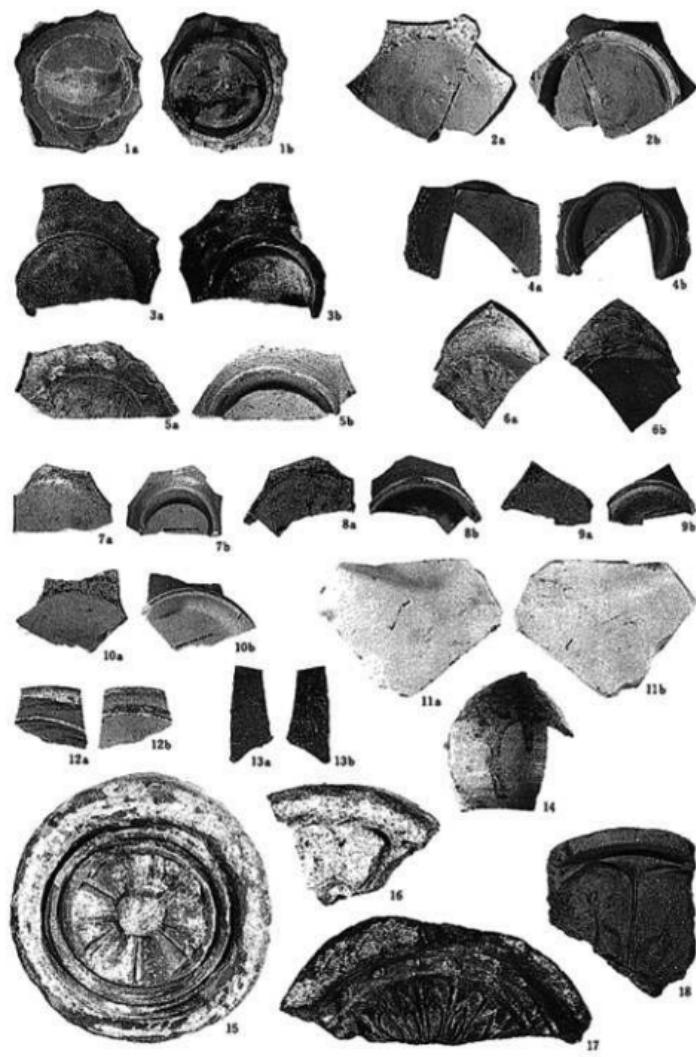
图版16



圖版17



图版18



図版19



図版20

